わるま下

二十

哥ニ詞を名ニをわ

[V. 35]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 35
copy 1
Asian
Japan
Cage

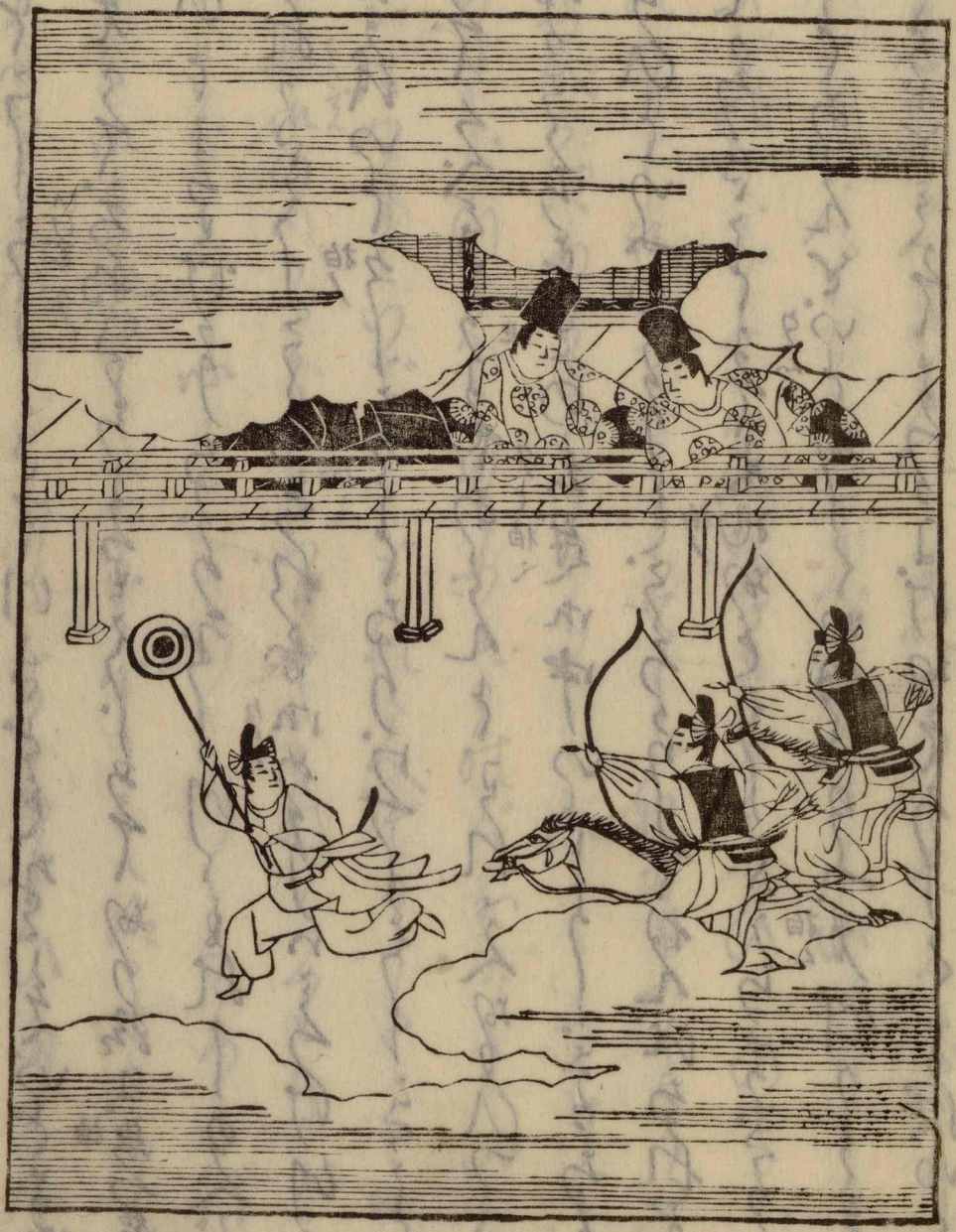
LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏年一才又年六七才ノ事也　上巻　末とけてはら柏ノ心

ことつりといはんどうれたくもいへるかれいでや
なぞかくことなることなるさあへしひぐらりを
小紡績が居るすを云ふ
なぐさめまてはいつぐすぐさん。かゝる事ひとゞけて
なしで。ひとことをものゝひ罪ゆるせまたなんやと
おもふつけてもおほかたまてはおしくめでたしと
おひさしゆる。源の御ゝあ。なほゆゞむころやそひる
たん。三月ノ地ごもりの日は人ぞあまた。源へ来りまへり。柏ん なほ
抱うくすぐろりしかれど。そのあたりの茂の気をも
ふてやなぐさむとおひて。源へ来り給。地ぞこれのりゆゑ。二月
とありしをすぎて。三月もたゞ。若つかゝ 此き月なれば。口おし
と人ぞおもふ。この源よりうまとねあるべしとなく

つくへて。例の川どひのふ。左右ちねさうれなりしひう
て来りのへがすけうちなどいどこゝかりして。こゆことの
給しかと。うちゆこのてぐれうぐどもありかれば。
右いでくおきを給。兼ぐんだも。つきぐしきうぐうん。
これまへしりへの心。こ面とりまうにけさて。くれゆく
まくまかふまとぢむうすこのかしこともあはこ
しく。こぐるく夕うぎまこれのうげいとぐうこと
やしてうしで。人ぐいくくしひすぎまて。えんなり
かけもれども。こなるうなる。人ぐのれこころこえぬ
べきを。やなぎのえを。もくこひあて川べきとねる
どものうけゞりていとう。むぎんなりや



地とこしこしきてけさどもをこそ。いどまを
絶えて。ちねぞちよりそこじめてあり給ふ。柏 楽つ舞
ひとよりけりなぐめをしけくもれしのへだ。
かれかたしこころもわかれ。タノ めりいこうけけく。
ムおす紙いと。柏ノ しきことなり。けづらしきこと
いでくべきようやあらんと。これさへなりひつさ
ぬうこちとて。地 この玄 タと柏ニ 遊れ中いとよし。さうなり
らひといふなりもこころかりてねんじなれば。
そかなきことにても。柏ノ おもしくうちまぎらく
ことあらんを。タム いとおしくおぼしのふ。柏ム 男げうしを
ちとぐをこえてまつりにけおそろしくまばゆく。

うら心はあるべきものゝ。なれめなるんまてぐらり。
なしうしぶ。人にてんつるべきなるまひはをじと
せふものを。まして御はけなきことゝせひまびてゝ。
なれありし孫こをぐるにえてしがれ。御まふことうる
らふべくはあしほど。うるもしさびしきなぐ
さめるも。なれかんと御まふに。ものぐるおしういう
でうはぬすまいでんと。それさんぞうきこと
けう。女(ていでん)れのれうるりまいりて。(拍ノ)ものがうるもなど
罪しまぐらりし心ろ。いとおくなくこころもげ
うしきれもてなしまて。まかにこえ給こともなし。
うるれなるしひにぐる。けどをくなるしひ多なるを。

ゆくりかまあやしくはありしつぎぞうしとは。
さすがようちなばゆれど。なばろけまもあるまが
心かし。あさくもしひなされず。去定より（柏ノ）家りなて。
ろなうかよひ（女三は似つかひ方をこ）なへる所あらんしと。絶とぐめて
ミなるは。なひやうまなどはあらぬれうちなれど。
さばかりの山有様もて。いとことまて。おてはな海め
しくおりします。（冷）うちの山孫この。おまるひきつれ
たりけるもしかしどもれ。所ごはあがれて。此（去定）家にも
まいれるが。いとおりしげまてありくをうは。まづ
（女三と）せひいでしられば。（柏詞）六条の院のひめ（女三）家の山うたり
もべる孫ことそ。いとしぬやうなる所もて。おりし

はべしか。はつかになん見給へしと聞え給へば。
(春宮ノ心)猫わざとらうたくせさせ給ふ御心にて。くはしくと
はせ給ふ。(柏詞)から猫(柏詞)のこゝのにたがへるさまして
なんはべりし。おなじやうなるものなれど。こゝろをか
しく人なれたるは。あやしくなつかしきものに
なん侍るなど。ゆかしくおぼさるばかりきこえなし
給。(東宮ノ)きこしめしおきて。きりつぼの(明石姫)御かたよりつたへて
へて。きこえさせ給ければ。まいらせ給へり。(女三ノねこと)げにいと
うつくしげなるねこなりけりと。人々けうずる紙。
(柏心)衛門督はたづねんとおぼしたりしと御けしきを
みおきて。日ごろへてまいり給へり。(柏ノ)けしきありし

より、朱雀院のとりつきて、おぼしけれどもおひし
ゆゑ、此山ずみをくれ居てはゝ、又この家（無文）にもしたる
しう案り、心にも居たり、此ことなどをしへ居
給とて、此（柏訂）孫こだあまたはどひ給ふなる、いづれ、
このうし人（ねこを云へ）いと、聞ゆてうつけぬへり、いとらう
しく覚えて、かきなでつゝねたり、家（無文訂）もげにおしき
き後しうりけり、心なんまぶなつきがたきけ、こゝな
まぬ人をしたりにやあらん、こゝなる孫こだ、ことな
をとらずしとのぬへば、これ（柏訂）もさりつきまへごろも
おさゝくもべしぬもれなれど、その中にも心し
うきはとれづらしくまもしぬ給へんしなど居て、

まさるどもこゝろふめるを。これもしぞし給ひり
あづかんと申給。こゝろのうちに。あるがちりおこ
がましく。かゝハおぼゆ。つゐにこれをこゞゆとなして。
よるもあさりちくふき給。あけてゞ。孫このし
づきとして。なでやしなひ給。ひとげと紙りし
心もいとよくなれて。ともすればこゝぬのすそにまつ
まれ。よりふしむけるを。まめやかにうけしと
ゝ。いとゝくながめて。たしちくよりふし給
へるにまして孫しくといとらうたげになけばかき
なでて。うたてもすゝむかれとほゝゑまる

柏

こひまぶり人のうゝことてなしをばなれに何

とてなくねなるしん。これも昔の賢(ちぎり)にやと。かかな
こうのゆへがいよくらうこげりしなくを。ふと
ころに入てなぐめゐゐへり。ごごちなどは。おや(後達詞)
しく。まもりなる孫このときめくなる。かやうなる
もれ。こいれ給りぬれ心まとこぐめなり。家(長家)よりめす(ねこを)
まもまいしをず。(柏ノ)とりこめてこれをかくしひこゆふ
(比)左だ母愛の水(む)方は。(以)左愛の兵道よりも。(タ)左だ母の兵
をがなん。(むん)むかしのまくまうとしぐ世事しゐへり。
心だんのかどくしく。けぢらくおもする兵(む)なて。
ゐいめんし給時ごも。こまやかまへごてこる気色
なく。もてなしこまへれば。(タん)左母も(以名姫)ちげいさるどの

うとくもてなしたまひ、そよびがたげなりけれ心ざ海まゐあまり
なりに、さ海(むとのすけ)ことなりけれむつびまて、おもひうちし給
へり、おとこ君(ひげ黒ん)、いまはましてかれもじめれ小方(桂柱ノ母)なれ。
もてまゐれまてゝ、おとこ(むと)びなくもてかしづき男ゝ給。
この御(む)もしにはおとこ君ぐちの根(ゑぐち)なれば、さうぐ(ん)
しとてかれまゐらせしの姫君えて、もてかしづ
まほしくしのへど、おほぢ宮(紫ノ父 式ア石)など、さしにゆかし
給ひず、此君(式ア石ん)をぞ(桂柱ノ母)、人けしへなしゐさ海まてこんと
おぼしの給、見(式ア石)この(地)御おぼしいとやむごとなく、うち(冷)
にもこの宮(式ア石)の御心よをいとこゝろなくて、このことを
そうし給ことをば、えそむき(冷ノ)給ひず、うろぐるしき

ねまさひ罪しかへり。おほかたもいまめかしくおほ
すう氣(式アロ)にて。此院(源)おほ(は)殿にさしつぎなりてそ。人も
まいりつかうまつり。世人もをもくおもひ罪しかり。
大(ひげ黒)ねもさる世のおもしとなりおべさしたかたなれば。
姫君のれおぼしなどてかはかくはあらん。さて
出る人ごゝとにふれておほかれど。おぼ(式アロ)しもさぐ
めず。柏(柏)来つ縛をさも気色ばまばとおぼすべかれど。
猫(ねこ)にはさひ(柏ノ桂柱を)おとしなりにや。かけてもさひよらぬぞ
うちおしかりける。(桂柱ノ母)とし君のあやしくおをひがある
人にて。よれつ子のありさ夜にもあらず。もてかち給
へるを。口(桂柱ム)おしこさもれにおぼして。まくむ(む)のれ

あたりをば心つけてゆかしくさひて、いまめきたる
れこころぎ海まぞもれし給ける。[堂]兵部の宮、ちなを
ひとところのこおもしてれ心につきて覚しかる
ことぐもは、これこぞひて、世中もすき海じく、人
ひしへにおぼさるしに、さてのこやも、おまえて
すぐすべきとおぼして、このひとりに乳色だこよ
ものへれば、[式部を云之詞]大宮、ちなにはかしづんとしりん女ご
をば、宮ぐらへにつぎてハ見たてちにこそハこを
なしめ、ぬこ人のすくよりに、ちをくしきをのこ、
いまれよれ人のうしろくすり、しれなきつぎなりと
のみて、いたくもなやましなり給いず、うけひきかし

頼つ。みこおまりうしこござろうすさ候。さりぐまと
扨ばそば。扨はそのおちづりまく云とおくりあれば。
ゑしもりひそぐしうまけで。おりしましそあぬ。
いとまちすくうしづき男九頼。武者ハ女ごあまくゝ抱し
おそ。さ海ぐ抱あげしきおりくいおはりまよ。も
のうりもしめべきれど。ち候山崩のこのおもひ
まちらかくて扨ばしてちあん。桂ノもしござきいおやまき
ひがあれは。よしばまなへてありまさり頼。ひげ玉太郎もなさ
ひざしよまきてぐきすとて。ねころうるこまてしれ
いあれば。いとちかん心ぐりしさてそれ。まりくひさとと
くちわ。此てづまりくじいれ。よろ川うりしる

じけなくれこころにいれなへり。宴（虫ム）もうをなひに
けつ水方をよとれにこひ罪なてさぐむりしのは
ありさ海に。なくてまつりさん人なんとおぼし
けつに。おしくはおしねど。さ海かもりてぞ。もれし
給けつとおぼせに。くちおしくやありなんかよひ給
さ海いと抱うげなり。大宴（式君ム）いとこころづきなきにぎ
かれと。おぼしなげきたり。はゝ（桂ノ母ム）君もさしそひがこ
給つれど。うけし心いでくつ時ハくちおしくうさ
よとせひもて給。大将（ひげ君ム）の君も。されば。いといたく色
めきなへるこ（蛍）こなと。もじめよりつがれ心にゆかし
さ海ハざりしことなれば。もれしとおもひ

ぬへり。かんの<ruby>恵<rt>むこ</rt></ruby>も。かくこれもしげるさ<ruby>れ<rt>蛍ノ</rt></ruby>さ海を。
ちりくさくぬふまはさやうなる世のなるをこまし
かば。こゝろなるゝ。いうまおぼしこゝ海はましなど。
ち海おしくも衣まもおぼしいでけるそのうこも
けぢくゝ見きこえんとはさひよしざりさりし。こゝ
なきけくしう心ふかささ海まのぬひつゝりしを。
あへなくあはつけさやうまや。さくおとしこまひ
かんとゝいとまづしくとしごろもおぼしつゝる
ことなれば。かゝる<ruby>あ<rt>式アラノ</rt></ruby>りまて<ruby>さく<rt>蛍ノ</rt></ruby>給へんことも。こゝろ
づかひをしるべくなどおぼす。<ruby>これ<rt>む</rt></ruby>よりもさらべさ
ことはあつかひきこし給<ruby>をうとの<rt>桂柱ノ</rt></ruby>遊などして。

うろ御けしきもしらずかかにかくうらずきこえ
まつりしなどするに心ぐるしくもてもなれうろ
御心ハなきに御（桂柱ノ祖母）小方といふさがれもあれぞつゐに
ゆるしなくしんじ罪し給（式部卿）みこうちハのどうにふる
心なくてこ給りんをぐまこそ。ちなやうなしぬなぐ
さめにはしふべ。それとむ川りのふ紙（蛍ム）家ももり
こそのひてハいと罪なしもぬことうなむしいと
あまれとしひし人をきてもなをもうなき心の
すさひハこえぎりしかど。ううきびしき拘急ん
じハことなりしもれをこころづきなく。いとゞ
音をしひ罪しのひ川ふ。ふるさとうしうちなるめ

がちにのこかりします。さいひ(地)にしを。ふるとせば
かりにあらぬれど。かゝるかたにめなれて。ぐぐさう
かたの山中にてもぐし給。(此万二四ケ年のすをこめたり)ちうなくて年月も
かさなりて。うちのこ(冷)かど山位(くゐ)につきをして。十八
年(源四十六歳にあたる)にあらしをなひぬ。つぎの君とあらしをなしべき
人こなりしまさず。もれくも人なきに。よれ中もう
なくおぼゆる紙。心やすくおもふ人ごにもたいめん
し。ひたくしぞ海にころをやるて。のどうにすぐ
さ海ほしくなんと。遠れおぼしの給をつるを。日
ごろいとをもくなやまをなしことありて。にはかに
おりぬさをなひぬ。よれ人あらずさうるもの此ら紙。

くのゝれ給ことゝおしこなげくど、恵家もおと
なびさせ給ひまされぞうちつぎて世中のまつり
ごとなどことまうちうけぢめもなりかり、おほき
おとゞちじのへうなりてこもりゐおひぬ世中の
つねなきまよりうしろさみ冷どの君も位をさり
おひぬるまどしかるき男のうゝかりをうけ世
なまかおしうんと思しのおひて左ぢ右ぢだ
まなりおひてぞ世中のまつりごとゝ川うまつり
給けり女御の君はうゝかれ世をもまちつけ給ひて
うきおひまされば、うぎりあかれ位をえおへれど
ものゝうきちのうちしてうひなりかり、六条の

二

女(明石)の御もしのいちの家、坊(ぼう)にしねこまひぬ。さる
べきことゝうねておもひしうどさしあたりては
れめでたくめおどろうくつぎ成なり。右大将(タ)の君
大納言になりなひて、例(タ)の左にうつりなぬ。いよく
あらまほしき御ありしひなり。六条(源ん)院ハおりねなひ
ぬる御(れ)衆(ぜい)院の御つぎおりしまさぬを、あらぎ御心志
うちに思ひ、おなじすぢなれど、さひなやましき御
ことなくてもぐしなへるづりにつゝいかくれて。
すゑの世までいえつゝふまじうりけるに御すくを
口おしく、さうぐしくおぼをぐ、人りのこまひ
あもきぬことなれば、いづきくなん。春宮(明石女院ノ事ニ)の女御も

みこゝろおさまらせ給ひて、かくれさせ給ひ
なし。源氏のうちつゞき給はおぬべきことを世
人わすかなへるまつけても、冷泉院の給ひゆへ、
なりて、おもひちまうしときさへもへるところを
おぼするかよく六条院のかくしも、さし月ろ
そへてみかりなくさひとしまのへり。院のくらゐ
おぼしめしもやうなきも御せうしてつかり給
なぐしつくそしもげるめでくおほきはさき
れ給なり姫宮の御とい、こうじれ心とゞめてさへ
まみ給ひ、おぼくるのうちもおほくまそうしづれ
ありし、紫の上へのれうきほひまは、えぬから

ゝ雨ゆゑ。こしたゝ。ゆゑまゝる。れ中いとうりしく
むつび罪ゝりしまひて。いさゝかあるゝことなく
へだてもしし給ひぬ抱かし。いまはかうおほぞうの
すまねるしで。のどやかなとなるひともとなんとぞ。
このよいいかゞりと。ゝゝてつゝろちすゝよもひ
まもなりまゝり。さりぬべきさ雨に。そしゆゑして
よと。まめやかな罪ゝ給ありくあるを。おゝまじく
つきれことなり。こづゝかゝきほいあること
なれど。さまりてさうぐしくおぼしまひ。ある世は
うちゝん。れ多様のうしろめたさまよりこそなるゝ
ゆれ。つねにそのことくげるん後にとをりくを

おぼしなれなどのこゝろまくらげ実もふ女御の君、こゝ
生
こゝろをまことのれおやまもてなしきてなひて、
御
れうるはうれ、かれ御うしろこまてひぞしも志
しなへるしもぞ、中々ゆくさきこれもしげま
めやこゝろけり、おま君もやくもすれば、こ座ぬよろ
こびのなるゝ、ともすれば、おちつゝ、めをさへのごひ
こゝらして、今なゞさうれしげなるゝあしは如て抱
し給、すゝこしの御乳、かけぐもたしこ歯もん
とて、春宮の女御の御いのりうまうで給へとて、
御入道ノ宮ヘ文ニ
かれもこゝあけて御しんずれば、さ歯ぐのいつあし
きしとゝもおぼゆり、さしごとの春秋のかぐしは、

うなしずなげき世のいのりとくらへたる乳(ぶん)どもげる
うれいさほひなるでいたるしたまふべきこと
ともしひとさてざりそり。こゞたしまうきたる
をもしきのざえぐしくさかぐしく。伝神も
きこいれぬつべき云の葉あきしなり。いつぞさる
やまづしのひぎり心よ。うつくとぐもをしひより
けんとおもれまおほけるくもあらんず。さらべき
まてしぐしうりそめる力をやけしけり。昔志
よれとこなひべまやまえんなど云しめぐしする。
いとゞうらぐしくもおぼされざりそり。此さびハ
この心とばあらりし給ふず。こゞ俗(源)のれまれまふで

まていでさら給うしづくひのまれさはがしかるし
しほどそこらのれ鞍どもこれもこしけく
ぬへれどもおもを世中まくあらしましてゝ
かいろくのさんをこぬふにけてを神のれ
こすけハけまれがこくて基のうへもぐしこそ
さをぬひて まうでさせ給ひぐさ世のつゝあらず
いこじくことぞそぞすてくよれまづくひあるまじ
くともぶりをぬへどかぶりありかれどめづらかる
よそほしくあん ぶぞ遣りも大臣ふる所をなさな
まてハこれつうまつり給まひ人ハこふのまけだの
うちきまげまけぶちひとしきかぶりをえしせ

絵ばしらひまいてぬをばたちまうれへなげきてたる
すきものどもありけり。面いぢうもいたし水。かもの
まんじの柔(まり)などをめしてへぐのうちくのことは
せぐれたるかぎり。とくのへさをゆへりぐたしなを
たるみたりなん。近衛づかされ名たるき恨をめし
たりけるれかぐらのうたまは。いとおほくいうう
まつれり。内(今上)。去年。院(冷)の殿上へかたぐまつれて。心
よをつかうまつるかずもしらず。女くまつらしたる
上ぜうのれ馬くら。馬ぞひずい分(ぞん)ど稱りもしらハ
つぎくのとゆりなどまて。とくのへかぎるまたるか
ゆん物。またなきさ庵や。女(いたぬ)れ殿基のうへ(坐)ハひとりは

なりたり。つぎの御車には、おしの御かたに、おまぎ君
思ひてのりぬへり。女御（皆本作）の御めれと心しりまてのり
たり。かたぐのひとぐまひ。うへ（恐）の御方の女。女御（皆本作）殿
のいつく。おしの御あがれのこつ。めもあやなり
かぎりたるさうぞく。其様。いへばさらなり。さるは尼
君をば。おなじくはないのなるこの志はのぶぞうりに。
人めしくてまうでさきんと。院（源）へのまひかれど。此
たびはかくおほかたのひぐまつに。うちまじらんも
かたはらいたし。もししふやうなるん世中を。約
いでたるぞと。御（皆本作）身は志げめ給けると。のたりの命
うしろめたくて。かりぐもれゆしがりて。しきひ

まり給ありけり。さるべきにて。もとよりかく白ひ
給ひ力どもよりも。いうじかりけるちぎり。あらはに
もひしらるゝ人の此有さ海なり。十月中十日
なれば。神のいづきにもふくぞも気かりて。まつの
しるもみぢなど。なとにのこ秋をきかぬがほなり。
ことくしきこ海もろうしのがくよりも。あづま
あそびのこゝなれたるはなつしくおもしろく。
なこ風のこゝ急にひゞきあひて。さるこゞかき松風に。
ふきそへたる笛の○も。ほかにて。きくしらべにハ
かりて力にしこゝとにうちあはせたる栢(ひやう)し
もづこ紙をなれてとしのへとりたるかるに。おどろ

もづこ紙もなれてとしのへもりたるかたおとろ

おどろしかるぬもな雨めしくすごう面白く。取
うらはましてきてしかり。山あねはすれるうけの
ふしは。松のこどりはこしまがひ。かざしのもなれ
いろくは。秋の草ありことなるけぢめはれで。
なまごとはものこまがひいろふ。もとめ（末子）こもつる
すゑは。けうやかなる上道アハかるぬぎてありぬふ。
白ひもなくくろきうへのさぬは。すまうがされの
えびぞめれそでなは。はかはひさほうろがしたるは。
紅ふうさあらめれ毎もとのうちしぶれたるは。気色
ぢうりぬれたる。松ぢうをばはすれて。紅葉のちうは
しひはたさう。こうまひおほかうすぐるどもあり。いと

しろくかれたるおぎをうちやかまぎして、うぐ
ひと色(ふり)まひていりぬるは、いとおもしろくあらぎ
ぞきける。おとぐ(源ん)しのことおぼしいでられ、中
ごろしづこなひし世のあ様も、めれまへのやうに
おぼさるゝに、そのよれことうちうぶれたりなふ
べき人もなければ、ちじのおとぐ(れ)せぞ、こひしくしひ
笑ひ給ける。いりなひて二のくる夜ありしのびて、
これ(源)かまた心をしりて経よしの神世紙
へたる松にことしふ。れ(比)たうがうりかきなへり。
尼忘うちしほれたる。かるよ紙(尼忘ん)うるまつけても、
かれうしまていまはとけれ給しほど。女(明石)の

志のおもしさし有さ面などさひ出りもいとかうじ
けるかりける身のすくされ程をさ。よ紙そむ事始
ひし人（入道）もこひしく。さ面ぐまもれがるしき紙。
かけきゆくしとことゝいうしき事
（尼志）すこの元紙いけるかひあるなぎさとれとし
かなあまきをふやさるらんとそくハびんなるらん
とこゝうちさひけるまくなりなる
（略）せかしこそまづけきられるすこよしの神の
さるしとこるまつけてき。（比）とひとりごちかり。よひと
夜あそびあるしなふ。さけれ月さるますこそて。
うこのおもておもしろくこそけるに。さもれいと

こちらうをきて松ばらも夜まがひて。よろ川のと
そぐろさむく。面白さも哀さもこちそひこり。基の
生 うへつゐのうきねのうちながら。ときくまつけて
こそ。けうある朝夕のあそびに。こゝふりめなれなひ
なれ。此かどよりとれもれ。おさくし給もので。
ましてかをこゝやこの御身のありきハまぐるらひ給
もゐぞ。めづらしくおかしくおぼさる
生 すゑのえの松によふくをく霜ハ神のかけ
こゝゆふかづらかも。こゝ無らのあそんのひらの山
さへといひけり。雪のあしたを見しやれば。まつり
の心うけ給ましまやと。つよくこれもしくなん。

女れの志

神代のてまちりもろさうさだらまゆふうけ
そのかみきよめしと中勢の志
ちかり子がゆふうちまざひとく露はげまうち
志かき神のちかしかうぢく冬すちしまでおほうり
けりをおほまきんまうはさくとらん。ゆく衆おりかしの
政ハ。まいのふまでめさ絡おとてくちも中こいでぶて
ちそ伝の子とせよりいちれて。いまめりしこさくとし
ちけれバうかさくてちん。ほのぐとあけゆくま。
露ハいよくかくて。まとすゑもうごくしさ
まで。ゑひすがみろかぐしおもてどもれをのが

かゝをぞしらぞ。おもしろきとは心にしらて。よい
火もかげちゝめりさるよ。なり紙まぎいく。とさうき
ぞ紙さりへしつゝ。ひさひ。さこゆろ。れよれすゑ。
なもひやるぞいとゞしきや

比
よろげのことあらず面白きまくにちゝ紙一ゝにあさ
まほしきこれなりもあらであけぬれば逐浴(くりたこ)にきお
ふも口おしく。ひさ人ごとふまつだらにまちぐとこそ
つゞけたる此車だの風にすちびくしたるすぐれ志
ひまぐも。とさんのかげより。茶のよしきをひき
くれへたりとこゝろにうへのきぬの多くけぢめ
をきて。おしきりけだんとりつゞきて。もれまいり
けるをとぞ。しも人などいめにつきて。めでたしとい
おもへる。尼茶のおまへにも。とんかうのおしきに。
あ紙にびのおもておりて。さうじもれを無りとて。
めざ風しき女のすくをかなと。どのがぢくれし

めさ風しさ女のすくをかなとどのがむくれし

まうごちそり。まうてぬひしこちもことくし
くて。けづくしき神ぶり。海ぐは取をげか
ましを。人さはよろげのをうえうとけらし給。
いひつぐくるをうさく。むつりしきことぶもなれば
かれありさ海をも。れ入(ゆ君)のきうずえぬよ。
かけえなれぬへるのこなんあるぐりけなかくさ
ことなりし。まじらはましも心ぐりしらや。世中の
人これをさめしまて。ごろごろくなりぬべきこる
なあり。よろげのことにつけてめでおきこよれこと
ろさまて。なりしの花君とぞ。さいえいべにいひかる。
かれちじのおほとのこあふえの君ハすぐろくうろ

ときの人紫まもあしのあまぶくとぞさいを
こひけるの君のこ(朱ん)とは此をこるひをいこじく
しのひてうち(今上)の此ことをもきくいれこ海ゆず
長社のじ華まるんじうしといでこれのことも
まじつけり姫宮(女三)の此ことをのこぞおをえ見し
まるこでこの侵(ほ)をば我ぬけるこの此うしろこま
せひきてしまてうちくの此心よせあるべくそ
うをさせ給二(女三ノ)宮まるりのひて此封(こふ)ちどまさる
いよくさるやうは此いきほひそふ。あいのうへ(宮ん)
くく年月まそへてがこぐまきり給此(女三ノ)見くま
ワ月はこぶひとくころの此もてなしまへ人は

ぞとへ〇ど。おもひそめし川よりながれの此心だらんよ
つねはおもらん。さへん紙にみてぬきうらう。
心とそゑ思ひまし。かれど、いもにあしけばしけれど。
さしころやうまやかばさんとつまれてぢらじ
しくまえ思ひ路ず。うらの（金）こうどさん。（女三八）ぜ心ぐせ
うとうまことしのへば。（添ム）ぞうつまとれまんもつと
（女三八）おしらそ。ひらり路しとやうくひとしとやうま
あうゆく（法ム）ざろべきえとおどうりとへおもひなぢ。
されだなとのこやすくずかばされなれど、おす紙
つれなくかるどさ海まてすぐし路。去女のれさし
つぐの。女一の姿と（法）くるもよもけてうしづきまり

給。その御あつかひはなんづれぐなり御よがれの御
どもなぐさめ給けり。いづれもけるぞうけらしく
なるしとしひきてしかへり。夜の御うるはかくさり
ぎりなり御むまごあけかひをうしやうて。大将の
ふたこのかいしのすけどしの君ぞおちはむかへて
ぞうしづき給。いとおしげまて。心ぐへも程よりは
ざれおしすけされば。おとぐのふたこもらうたげ給。
すくなき御つぎとそしまうどすきはひろぞりて。
こなるかなるいとおほくなりそひこまふ氏。今を
こぐ是をうけらしこあつかひかひてぞ。つれぐも
なぐさめ給けり。右大殿の乗りつうまけるとかしは

二郎君 法ニ中御云

ひげぞ

ことゝいましへよりもまさりてしたしくいまは和
方もおとるべきてゝ彼昔のかけくしきすぢ也
さるれ給ふやさるべきおりもいたり給つゝ基の
うへりも此對面ありておしまほしくきこそ
うたしぬひかりひめ宮のこゝぞおもゞき海にいくく
相ときておいします女此の君はいまは相やけ
ぎ海に忘さるち罪なひてこの宮をばいとこゝろ
ぐるしくおさるらしん此姫のやうにせひてぐこそ
こそまつり給ふ朱雀院のいまはむげに世ちくなり
ぬり心ちしてもれ心ぼそきをさしてこのよれこと
久りこゝじとせひすれどこゝあんなんいまひと

くびおもはましきのこりもこそあれ。
ことゞもさへ候はで。[女三ノ宮へ]ひとりかゝべくや給
られば。[源ノ]かゝどもげによろべきこととなりかゝ御気色
あさましくむすそでざるすこしよりのかべきとおもして
うちかたちかしのひけるが心ぐるしうさとく。よりて
かべきことあげしまうくいかでなくすまじき、
さ候まそやかへひとりかへべきおもはずなりて
かゝらんざきやかへべきと言しめぐりすこのくび
[若君子ならび]らさ候りんさしりれあじしてやとお
ぼしてさ候ぐのれはうかくのとこいつまおもはれ
まゐりけのさかいひおもは〳〵れとさ候とまりかへ家

ことにもなれば人の御心をしひどもいりて。えし
めづらすいかしへもあそびのうるはしろとにめ
さをゆへりしかばまひ人がく人など後心ことま
さぶめしてぐれたる恨をとゝのへさを給。大(ひげぎ)大殿の御
子どもかたり。大(タ)ねの御こなりしのしけどしの
ろとへて三人。又(タノ子ノ子)ちいさ給ちまけよりうこのもこれ
殿ごをさせ給。笠(宣)へのこやのつゝみそむつゝみすべて
さるべきこゝやたちの御こどもいへのこの君ぶちこな
えらひ出給。殿ごの君ぶちもかたちよくおちまじる
(まひ)舞の姿(すがた)もうろことなるべきをさぶめておまるの
まひのまうけをさせ給。いとしうるべきたびの

ことにて、これ人心をけらしまひてなん、うちくの
まれくしに、ぞ手いと後なきころなり、女三文はもとより、
さんのれこと紙なんなしひまひけるをいとまゝ
くて、朱院にもひきけれなりまひましかば、ふおぼけ
なくおぼしてまゐり、女三ノ朱詞給えんついでに、彼れことの○
なんさう後ほしきさりともさんだらはひきさり
給つしんとまううごとるまさしまひけるせ、今こうち
にもさうしめしてけるさりともけるひことなるん
し、朱院の此前にて手けくし給へんついでに、来りて
さうぐやおどのゝ後ゆせけるを、源おとゞのさゝも
こゝへさゝまてうしげさりぬべきついでごとには、

そへ字ゆらしともあつかせ。うけしひへげはおのさら
給はられど。あふきらしめし京あつ。まれやうきらそ
まはとよぞぬと。ちよ心ありてまいらかんへられ
けりでまいらしめさんとゆ。ゆきちよゆきしげせ
給りんハいとちらしちらへべきしとうもと。うし
なしく言して。ばごろぞれ心とゞめてとして字れ
給ふらへべしとちるてかろうつおもちるさたごく
ぞの字。きまつけてうをらべきひごとぞうしのさむさ
めりさ紙とくのへいぞしやんごとちなるらべきそきその
きざりとぞうしそくそへ字えし給は心ありちく
おしするやうちれど。やうしくうろき給まいらいと

よくなり給ひ、ひるはいとひとしげくなる紙ひとこひも
ゆしあんずるいとまもこころあはこくしくれだ
よろくなんしげくまことのこころもしめなるへき
とてこいまもそのころはれいと面写しなひてあけ
くれとしへきこし給、女はの君まも基の上まも
きんはなしりしこてまつり給はさりくれ、このあり
おきくこくなれぬてどもひき給くんをゆりしと
見して女はもしざとありがた紀はいと面をこぐ
しだしときこしなてまうでなへり、こゝかゝ京おし
するをまさも気色だこなていつ月きだうまぞ女
なへれバかゝ口ざなどまことつけておりします

なりかり。十一月すぐしてハ。氣りたまふべきれ（今上ノ）
をうそこうちしきりあれど。（若あれん）かろついでよ。かく
おもしろさ。よりくのれあそびをうしやましく。な
どてまれまつる人。給ハざりけんと。つくしさひ罪し
給。冬（比）のよれ月ハ。人まうびてめでもふれ（源ノ）心なれば。
おもしろさよれ雪のひかりに。おりにあひたりてぜ
ひきのひつ。さふふ人ども。すうしこのうたり
みのめきたるに。れしとぜとりぐにひかりて。
あそびなどし給。としのくれ川うたハ。（笠）多いなど
まはいそがしくこちたるなるのれいとなることにどの
づしれらんじいるくことじもあれば。春のうし

らうちゃんゆゑべなどよ。いつでこのれことの○き
うんとのおひ口ろうよ。とし（係軍七女）ゑぬ。院（朱）のれ繁。まげお（今上）
ほやけよりをさせ給ことごもいとこちらさまよ。さし
あひていびんなくおぼ（係ノ）されて。すうし程すぐさせ
給。二月十よ日とさだめおひて。がくんおひんなど
ありつ。れあそびたてぎあり。此（司）ひ（紫）ひよつ○よゆしう
すれ（女三ノ）ことの○。いつでこの人ごのさ（箏）しびその○も
ほうをて。女がく心ふさをん。ただいまのもれ上ぎ
どもこそ。さしよこの口ろりの人ごのれころもちひ
どもよおさし○。ちうぐしくつゝへとりたることハ
おさくなけれど。なよごともいつで心りもちね

ことあらしとなん。おさなきほどにしかば。よに
ありものしたといふかぎり。又こうきいへくたゞさ
なべき人のつゝへどもをのこさず。心こゝし中に。
いとかくもづしきかなと。おぼゆりきはのひと
なんなりし。そのこゝよりも。又このごろのつゝさ
へごのざれらしめさすぐすにもゝおさくなりに
こうべし。さんもゝまして。さしにまゝ○ぶへなく
なりにこうとか。このれゝとの○ぞうりぐこに。けゝへ
こう人おさくおしじとのゐへ。ぢに心なくうち
ゑゝて。うれしくうくゆかし給程になりにけゝと
おぼせ。サ一二ぞうりになりゐへどもをいとゆうじく

うたなりよ。さびはなり心ちして。ほそくあえかに
すけたしくのこゝろ。詠（朱）（源詞）にもこゝなりたまりで
こしへぬるを。ねびまさり。詠にそなりとはたんぞ
ぞうり。よういくもへてこゝなりたまへとゝことに
かれてとしへさてし。詠（地）げにかうはうしろこなく
ていましていたけなくなりしますは有様。かくれ
なりしましと人ぞもこゝなり。正月大日ぞうりになれば。
そしもおしこさほどよ。かぞぬるくかさて。はまへの
むめもさうになりゆく。おほうこの茶のまどもく。
これ気色ぞこゝ。かすこゝりにたり。月（源詞）たくぞは
いそぎちくもれさもがしかんてり。かきあもを

給りんれことのほも志がくめさて人いひなさんを
このごろ志げりなるほどに心こゝまへとて志ん殿に
（女三）
（宮 ゆれ女れ ゆれちどこ）
ひたしなり給れ（地）ともなり。これもくとまれゆし
がりて。ようのぼらまほしがれどこなるにとをさ
をべえりとゞめさをなて。すこしねびれどよし
あらかざりえりてさふらしちを給ひけりべしかたち
すぐれたる宮人おのいろにさくらのかざこうまて
いろのをりものゝあこみ。うさまんのうへのもの海。
くれなゐのうちたるさ海。もてなしすぐれたる恨を
めしたり。女れ（ゆれ女れ）のれかたにまもれ志げしひなど。いとゞ
あらたまれなころのをしまりなきに。をのくいどに海

しく、けらしたるよそほひどもあざやかにたるし。
けしたし。なをいろますまうのうざえ。かしあやの
うへのたち後。おこめはやまぶきなるかしのきを。お
なじさ後ありとくのへたり。あしのれかたのも。
ことくしかしで。こうだいふたり。さらしふたり。
あなじのかざりまて。おこめこくうすく。うちめな
どえなしできせぬへり。女三のれかたまもかくつどひ
ぬふべくきくぬて。けしたしべのすがたげりはことま
つろりをしまへり。なをまく。やなぎのうざえ。えひ
ぞめれなこめなどことまこのましく。めづらしき
さ後まはあしひどおほかたのけしひのいかしく。

けんかさくとさへいとなしびなしひさしの中の
れさうしじをもちらて、こちらへなるこうさちやう
ぢうりをけぢめにて、中のまへ院のおりしますべき
おましよそひたり、かふの桐子あるをにはにしらべ
をめさんとて、右おほいの殿のこらう、かんの君出れ
たしのある君、さうの笛、左大将のれうしう、よこ
笛とふきて、すれこるさふしうを給、うちにはれ
しとねぢなしべて、れしとぢ気りつくす、ひしし給れ
ことぢ、うりしきえんぢのふくろどもにいれたり
とりいでく、あしのれうるにびれ、黒のうへなり
まだん、女れのきゝにさうのれしと、こやにはうく

ことくしきことハ。まぶえひきこまりぶやと
あやうくて。例のてなしゝ。なへるをぞ。しらべて
なり給。さうのれことハ。ゆるふとなければ。なをかく
もれにあはすなりのしらべにつけて。ことぢの
こちどうぶるくもれなり。よくその心しらひとく
のふべき紙。をんなもえもりしづめじをなを。たね
をこそめしよをひべるれ。このふえふきぶ。まぶ
いとおさなげまて。ひやうしとのへん。これしづ
よりしぶとひしひなて。たねこなるまとめせぶれ
るぐしづしく心づひしておりす。ありしの
志をもなちてハ。いづれもこれすてがたきれでし

どもなれば、(添ん)此心くまんて、(タ)大ぬのきく給へんに、なん
なりべくとおぼせて、(略本)女此いつねに、(今上)うへのきこし
めすにも、抽にあまをつくひきなしぬへれば
うしろやすき後、(洪ノ)見ぐんこそいくぢくなりぬしんべ
なれど、何とさぶまりたることなくて、中々をんな
の身ぞりぬべくれ、其のことの日にこれうきあまたすり
抽なりなを、こぐらくところもやとおぼいとおしく
おぼせ、(タム)大ぬいといくころげさうして、(禁中ノ)おまへの
ことくしくうりたしき此心にあらんよりも、
くふの心づかひにことにまさりて、おぼしたまへど
あざやかなりけるをしうりにしたるけぞども、袖

いとくこうさしめて、ひきつくろひて、乗り給程、くれ
はてまさり、ゆへあるこそかれどきのそらに、蒙を
こそのかゝゆきさひいでられて、枝もこちむ斗咲(ばかりさき)
こぶれこり、ゆるしうるうちかく風にえなしず匂ひ
こゝ、こすれうちの分りもかきあはせて、うぐひす
さへふつまにしけべく、いとじきあとゞのあたり
の匂ひなり、こすのしるこよりさうのれことのすそ、
すうしさしいでしかぐしきやうなれどこれ
がなとこのへて、しらべ心こゝ、こゝにまるうとき
人のいるべきやうもなきをとのゐへがうちかしこ
ありて給わり給ほどようい御ほくめやすくて、いち

こちでうのゝ志ま。ぢちのをとゝそ。ふともしらん
やしでさふらひ申へば。（源詞）おなさうさありをばらりまへ
てひとつすさまじかしでこそとのゝまへ。（夕詞）ばさしま
ふのれあそびのさしいしへま。まじらふばらりの
てげかひなん。えしぎ侍りけるをと乳色ばしき給。（源詞）さも
あるゝとなれど。女がくまえゝとまぎでなん。まげま
けるとつるゝかん。名こそおしかれとてけしひ給。
（夕）しらべたてし。おしさほどまかさあたをばらり
ひきそ。しをしを給つ。（比）このれまごの君ぐちのいとうつ
くしきとのねすがるどもまて。ふきありきうる抱の
孫ども。まぐるけれど。おひさきありて。いうじく

おしげなり。れことぐもれしらしべどもとくのひ
まてくうきあるをぬへるほど。いづれとなきなるに。
び(岩ノ)まくすぐれてぐずめきうきさびたるてづりひ。
こけてくおもしろくきこゆ。まぐん(紫ノ)にたね(タん)もこく
とぐめぬへるにおけしくあつぎやうつきくるれつ
まれとまうきへしたるれの。先づしくいま
めきてさしにひつぎとあるぐぐどもれおどろく
しくうきてくるしべてうしにおとしぐ。まぐさ
つくしくやまとことにもうるまをりと。きく
おどろかる。ふるきれらうのほどあしつにきくして。
おもしろきにおとぐれ心おちねて。いとまがくく

しひきこえ給。さうの(比 明石女法ノ)れことは。もれてひまぐに心
もとなく。もりいづるもれてねがしまて。うつくし
げなる御めしくのしきこも。こさん(女三ノ)はる紙つきさ
うなれどなしひ給さうりなれば。さどくしたしず。
いとよく抱まひぐきあひて。いうよなりはかれ
ことのゆかると。大ねきし給。栢子(ひやうし)とりて。さうがし(タノ)
給。院(ほ)も時ぐあふぎうちなして。かきへ給れこゑ。
むかしよりもいとじくおもしろく。すてしふつく
うな。もれくしきけそひてきこも。大ねもこゑいと
すぐれゆへる人まて。よれしげかなりけまくに。
いふかぎりなくなつしきよれれあそびなり

（此月よりの心地）御心もとなきころなれバ、とかくしてまかる
りけて、此ほどことゞもさとのへり。宮（女三）の
御方をのぞき（源ノ）給へれバ、人（女三ノ宮）よりけに（源心）ちいさく
うつくしげにて、たゞ御ぞのミある心ちす。匂ひやかなる
かたハおくれて、たゞいとあてやかにおかしく。
二月の中の十日ばかりのあをやぎのはつかにしだり
はじめたらん心ちして、鶯のは風にもみだれぬ
べし。あえかにミえ給ふ。桜のほそながにみぐしハ
左右よりこぼれかゝりて、やなぎのいとのさまし
たり。これこそハかぎりなき人の御有様なめれと
ミゆるに、女御（明石女御）の君ハおなじやうなる御なまめき

すぐるのいまはすこしまほひくそこつまてまて
けしひ心まくらしあるさ夜しまひてゞくさ紀
こぼれこうふぢのそれの夜まかりてゞるりしま
ましぶ菜ちまさあきぼしけの心ちぞしまへり
さうはいとふくしかまう程まありこまひてなや
ましくおぼしまひそれが此ともおしやうて
けうそくまおしかりまへりさぐやかりなかび
かりまへるまれけうそくは例の程なれがなかび
こう心ちまてゞとさしまちいさく川ろうやと
こもうぞいとあそれげまおりしけうそうぐいの
れぞまれぞしのかりぞしくとさうしまて

れぞよれぐしのかりぞしくとさらしまて

ほかけのはすぐさせまなくうけらしげなるよ。むし
さ紀のうへはえびぞめまやあらん。色こさこうちさ。
うすくつうのほそなるよ。れぐしのゝ夜れる程。こち
こくゆるゝかよ。おほきさなどよき程よ。やうぶい
あらまほしく。あらりまわひこちらる心ちして。茶と
いまださつしまことへてもなをもれよりすぐれ
こうけもひことよ抱しのふ。かゝるれあらりす。
あらいけおさるべき後。いとさしもあらずもて
なしなど。かしこさだしきもづしく。心のそこゆかしさ
さ夜してそこもうとなくあてまな夜めしく
こも。柳のおりものゝほそなるが。もえぎまやあらん。

こうち紀にて。うす地のもの。ちうなげなるにけて。
ことさらひがしこれど。けしひせひなしも心よく。
ほかづくりしかず。ら風のあをぢのよしこの。こ
しさしこうしとみ。まほまもねで。びいとうち
をこそ。こゝ乳色ぢうりひきかけて。こをやうつひ
なしこうばちのもてなし。孫氏こくよるも。まる
きがくなつしくて。さ月まつ菜こちぢかの菜も
こもぐして。としおれるかりおぼ田。これもうれも
うちとけぬれけまひどもを。こくこゆふに。大ねも
いとうちゆかしく覚て給。女いの笑へのこしおり
かりも。ねびまさりのくらん事語ゆかしこゝに。さづ

心もあるし。女二 家をばいますこしのすくをとよばまし
ばいづ物にてもこまりてまし。心のいとぬるさぞ
くやしきや。朱 院にさびくさやうにともむけて。
さりうじとしたもの給いをけるとと。ねたくさへど。
すこし心やすきるまこしのふれ女三ア けたひに。あな
づりさしゆとはなけれどいとしたも心にうぞかざり
かり。この紫ノ女 れ事をぞ。なまじともさひとよぶべきる
なく。けどとくて。年代すぎぬれば。ゆゑでかたく
おほかるに。心にをあるさ度ともこしなんとぞかりの。
くちおしくなげしきなりかり。あるがちにある
さうじく。おほけるさ心などにさしにあれし給

みずからくまでながめ侍り。夜(此)ふけゆくけハ
ひのやくあかり。ふしまち(十九日ノ月之)の月さしいで
たる心ちもするや。萩(源何)の花ずり月にしも秋の衣する。
うつやうなるまみえのまゝ。むしの声よりおかしを
さゝなるゝずさまなるひごゑに心ちすゞしと
ののへだし。夕(夕何)霧のあはれあはれふるさき月まゝ。
よろづのまみくとぶら侍りなきさゝ露の色
おもしろきずめる心ちもし侍れど我とさゝる
川かりおもをうつやうなるそれの気色。葉の露も
おもしろひ心ちりて。限もなく侍れ。萩のその
あはれさをくみすゞのまゝり。かゞ見ちなる月かげく

しけりまゐきあはをうるやうにいつでかふえの
孫などもえんにすそのぼりをてずるん女にもうるな
あられむとふるき人のいひをき侍けるげにさるん
侍りけり。ゐつしくもれしとのぼることに其志
多言こそことに侍りけれとしぬへがいかこのさぐ
めにいましへより人のわきまゐることに紙。すゑ乃
世にくぐれる人のえあきらめもつまじくこそ。地の
しらべぐ曲の地どもしもげにいもちをがつぎの
もれにしるは。さもありしなどのぬひていうに
うごいまいうそくのぼしうき。その人かれ人ぬ
ぎ家などまて。さびく心ことをぬふにもぐれうるも。

みずからくち故かゝれば。そのつみのかることなかへるが
ざいごども。いくぞえまのびとゝぬまや。あんくん。この
うくはのつゝやうちの所中に。ひさまざうらんに。
ならくなるべくこそおぼしめし。さうしばうくむゆれて
すゞすゞにくねども。すゞしひがしくしくねりに
らうてやあんくん。口おしうちあん。おやしく人のぞえ
こうねくとりすゝことだ。地の上へおりてまゐる所
ある。その所前の所あそびならる。ひとえずことはえらう
ふしんぞ。これてれをいかまぞとのあへいゞ。大將これを
ゐんとりやさんとやひ給りつれども。ほとうらぬ
くうのほつに。おとうすけてやつとさぬゝうつ。のぼら

てのせをさしあはせ侍るゝがゝや。柏[illegible]の和琴
[illegible]のはびもなどをとて。はげめげしうなる
あしまひきいで侍めれ。げまうたもしるき侍
しまひうけ侍もるもれてねぞの。これひとしくこそ
おどろき侍がる侍りくはぎともあるぬれあそびと。
ゝ〇てしぬへ侍ける。こゝろのさはぐまや侍らん。
さうがなどいとつゝうまつりまくてなん。[illegible]
りれおとゞがりしてかくありまつけて。こしらへ
なびかしこる〇など。こゝろありまをてりきこそ
のへるはいとことまもれしこまへ。おまくこそも
もなれぬ地に侍めるを。いとしくとくのひて

こそ侍つれとめできこえしぬふ。いとさことくしき
きはにはあらぬを。つぎとうるはしくもとりなき
ふしうるとて。しろりがれに侍し忍ぶ給げにかし
うはあらぬ男子（でし）どもなりし。昆蟲（びい）もしも。こくに
くちいるべきことまじらぬを。さいへど地のけもひ
ことなるべし。おぼしぬ所（あしそこ）にて。さくもじめくり
しに。めづらしき地のしゑれとなんおぼしし
うど。そのありよりは又こよなくまさりまうるを
やとしとめてけれがしこにうちなしぬへば。如（比）
などはすこしつきしろふ。よろげ（係詞）のことしちくに
つけて。なるひまゐぞぐ。ざしといふもれいづれも

きはなく見えつゝ。祇そろにあぐべきかぎりなく
なしひとゝんことはいとゝかゝれど。なまかはその
女ざりかゝき人の。今のかゝまおきくなければ。かゝ
ましをなぐらかゝまゐ。びえたゝん人。ざかゝるかど
ま心をやつまてもありぬべきを。さんなんなをまづし
もしく。まかれまくきもれにはありかり。このことは
まくとりなくのまゝにこゝぐ。さりたゝむかしの
人は。天地(あめつち)をなびかし。鬼神(そゝ)の心をやりしげ。よろづの
もれゝ祢のうちにまたがひて。なしひかゝき地も。
よろこびにかたり。いやしくまげしきもれを。
たゝさ世にあしたまり。たゝしにあづり。世にゆゝ

さるゝこゝろひおほかりかり。此くまくひきつゝふる
もじめつゝるまで。ふくこのことを心えしる人は。
おほくのこしを。しらぬくまくもぐし。身をなさま
なして。このことをまもびとしんとまどひてゞる。
しうかはうくなんありかり。げにもゝおきしうま
そしの月ほしをこゝし。時なしぬ雲雷をふしを。
くもいつづちをさはがしうゝめし。おがりしる世
まはありかり。かくかぎりなき物まて。そのまゝり
なしひとりひとのまがるく。世のすゑなればまや。
いづこのそのゝのゝもしまかはおしん。されど
れかの鬼神のしくとじめがるゝふきそめり。けゝ

もれなれいまやな風くまもびてさひかなれぬ
さぶひありけるのらこれをひくひとよりしぞとう
いふなんをつけてうつさ紀まくるいまはおさく
つくふる人なしとかいとくちおしきことこそ
あれきんのねをもなれていなるまごとをう抱をとく
のへしなしるべとはきんげよよろげのことおと
ろふるさ風いやすくなりゆく世中にひさりいで
もなれて心をくてくまろうしこ風とはよりまどひ
ありさおやこをもなれんことは世中にひがめる
抱まなりぬべしなどうなれめまて和このねをうま
りしるぞうりのもしをいしりをうざんしるべ

ひとつまもをひきつくさんことぐまにこそりもなさ
もれなるまいさんやおほくのしらべまづしりしさ
ぐくおほうを心まいりしさりには世まありと
あり。こゝまつてかりしうふといふもれうぎりを。
あまひくこゝ何ことをそのちくは師とすべき人も
なくてなん。此こちなしひしうどな低あがりその
人には。おろるべくもあらじをや。ましてこの後と
いひてはつてもるべきすゑもなさいと衰になん
などのうまへは。大(タム)移げまいと口おしくまづしと
おぼせ。この(添詞)ことこちの此中にさふやうにおひいで
給物し給ひて。そのうまなん。そもさまでながし人

給ぬし給ひしに、そのよるなん、そもさまでながらん

とまるやうあしはいくばくなるぬてのうぐるも。
とゞめまるべき。二字今より氣色なりてえまふを
などのゆへは、あしの君はいとおもぐしく。泪
ぐみて寄ねゆへり。女は（昭君ノ君ヘ）の君はさうのはことをば。
うへはゆづりきこえてよりふし給ぬれば、何ばまを
おとゞのおまへはまいりて。けぢかきはあそびす
なりぬ。かづらきあそび給。ちなやかはおもしろし。
おとゞおりへしうらひ給はしき。ことへんかさか
くあつぎやうつきめでたし。月やうくさしあがる
まうは。菊の色香（いろう）もてもやされて。げにいと心まくき
ほどなりさうのことは。女は（昭君ぬれ）の御門まをとは。いと

らうけにるうしくだくだくさのれけれとひくけく
みそて。ゆのふうくいかしくすゝそ男てつゝど。このれ
てづひいゆえさ夜ゝゝりて。ゆゑしゝまゝおゝしろく。
まくへくだあしず。すゞろりさまそであつやゝつき。
はむのそなど。ずべてさしま。いとうどあつれことの
れなりゝえうしう思はゞられきしべうらてつきちの
うさおもせど。おもしく夜のさゝるは。さん
もごゝれきしべおもうゝのそのあうま。心をくめて。
みむずひきおべきゝ。みのゝらせいと多ゝしく
そましてひきあふ。ゝしまうち名あしずいとうく
すゝそさゝも。若秋ゝろびのゆかにはりゝへるさもへ

そうまいりつくひさまふ心もしひをしへ
ゆへしまふ。さ雨ふぐへずいとよくつきまへ雨へるを。
いとうれしくおもぐしくさひきそし給。こ君
君ぐちのいとうれしくふきそて。をちまり心
いれるをらうたぐりまて。わつてく水まるんに。
しらひのあそびいなぐいあしで。をれうるるほど
まとさひつるを。とぐめぐるきものゝ孫氏のいづれ
ともなきを。さくつくほどのこゝどうしぬうどく
しさまいたくふけまをり。心なきつぎなりやとて。
さうの笛ふく君ほうりしけさしまひて。此ぞぬぎて
うづけまふ。よろぶえの君ほいこちるるより。をり柏の

ほそなるがほ。そう海などことくしかしぬさ海に
気色ごろりにて。大(タ)拍の表には。宴(女三)の此方より。さうづさ
さしいでゝ。宴(女三)の此さうぞくひとくだりかづけ。なり
ぬふを。おとゞ(源詞)あやしや。もれ〻師をこそまづは
もれめし給ひめ。うれりしさことなりとのぬふに。
宴(女三)のおりします此事のそばより此笛を。なる。うち(源)
りしひぬひてとり給。いとゞさう海ぶえなり。すこし
ふさなしぬへば。これこちいでぬふほどに。大(タ)拍
こちとまりぬて。此(タノ)子のもちぬへる笛をとりて。
いとゞく面白くふきてこまへるがいとめでたく
きゝもれば。いづれも〻。これ此(源ノ)をもなれぬもの

つゝへく、いとまちくのゝあるまてぞ、我れざえの
程ありがたくおぼしきこれかな。たゞ(タ)我は、君ごちを
れ車にのせて、月のすめるにまゐでぬふ。こうち
すがし、さう(タム)のことのかりて、いうじかりつゝねを。
こゝにつゝさてこひしくおぼしたまふ。けが(言カ)和方も。
おたち家のなしへ罪もなひしかど、心にもしめ給ハ
ざりしほどに、けれなりなひにしかば、ゆゑ
らかにもひさとり給ひで、おとこ(タ)君のお前にてハ。
もぢてさしにひさ給ひずなにごともたゞおひしか
にうちおほとさくうさ夜してこどをあつかひを
いとまちくつゞさくしまへぞ。おしこ家もちく

おぼゆ。さすがまたしあしくて。もれねくこうちし
たり。おいぎやうつさて。うつくしさ人ざ海まぞもれ
し給めり。僥（係）は夜（秋方つ）いへけたりぬひぬ。（紫）うへもとまり（女三は）
なて。（女三）家にれ物語など写しなて。おろきまぞけたり
なへる。日たりうちなりまで。おほとのごもれり。（係一）（女三なり）家のれ
ことの〇はいとうりさくなりまかりなりかいかにさく
給しとさてしなへば。（紫詞）たじめつくおちるまして
はのさしはいつまぞやありしせいとこよなく
なりまかりいてかはくことなすなくをしへ
さてし給ひんまいといへさてし給。（係詞）さし。てを
とりく。おぼつなしぬもの。卿なりかし。これ

れまもうきくわづらりしそていとまいりわざ
なれがをしへなしぬを院(孝)にもうち(今上)にもさんにさり
ともなりし罪ゆしんとのたまふときくがいと
めしくさりもさぞりのこと紙ごまかくさりわさて
れうしろこまとおづけまへるしるしにはとせひ
どこしてなんなど罪し始ついでにも昔よづ(笑ノ)ぬ
ほどをおつかひせひしさ海その世にいとまも
ありがたくて心のどうまとりわきをしへきこゆる
ことなどもなくちうき世にもちまとなくつさぐ
まざれつゝすぐしてきくあつかはぬれことの(笑ノヨゴンノタリ)乃
いでゞへしたりしもめんぼく有て大(タ)ねのいたく

うさかさ、などろさたりしかしさも、さしかやうり。
うれしくこそありしかなとこそしかふ。かやうの
すぢも、いまは又なとなくさく、文たちのれあり
かひなど、どりもちてし給さ海も、いたしぬこと
なく、すべてなまごとまつけてを、まどうしくこど
こどしきことまじしず、まがたさ人のれ有さ海
なれば、いとうくづしぬる人はよまひさしかしぬ
多めしもあるかをと、ゆくさきまでさきてしかふ。
地さ海ぐなる人の有様をこあれの給まくは、とり
あつめたしひたることはまことまたぐひあらじと
のこさひこそしかへりことしは此七まで此なふこ

のこせひこさそしぬへりことしは此七まで此ゆゑこ

なりぬひし年月のことなども義なりおぼし
いでこゝろ何いでにさるべきれいのりなどつゐより
とりつきてことしはつくしこゝへ。それさはがしく
のこありて。せひいたゝぬことしもあらんせ。なほ
おぼしかぐしておほきなることどもし給ふ。
どのづらきさせてん。お僧都のもれしこゝ所ゆず
なりにこゝろこそいと口おしけれおほゆるなりて
うちこれまんにもいとかしこかりし人をなど
の給いづこづらはおきなくより。人なりことなる
さ所にてことくしくおひいでく。いまれ世の常
有信ごさしかるにこゝぐひなくなん有けるされど

まるいよまもぐれて。なるしさめをこうるこもひと
まはまさりかりし。まげいはもふ人ゆしさ面ぐ
をくれ。のこりとまれるよもひのすゑにも。おかず
なるしとせことはほく。おぢさなくさるまじさ
ことまつけても。おやせく抽おもちしく。心まつかず
おぼゆることそひさる身まで。すぎぬれば。それま
へてや。せひし程よりは。いまくでもなぐらふる
なるんとなん。せひせしかし。恵の御身まは。かれ
ひとふしの別より。おなることなる抽せひとて。心こゝぞ
里給ぢりのことあらじとなんおもふ。さらに紀と
ゆひ。ましてそれよりつぎくは。やんごとなさ人と
いへど。これなるしずやすかしねもれせひそふまざ

ゆひ。ましてそれよりつぎくはやんごとなさ人と
いへどこれなるしずやすかしぬもれしひそふほざ
なりこうさまじらひにつけても心こゝれ人にあら
そふしひのこゝぬもやすげなさをおやのまどの
うちなどしすぐしぬへるやうなる心やすさことは
なしそのこゝは人にもてぐれたりけるすくをとは
おぼししるやしひのほかにこの女三のくつたり抱
しぬへるこそはな面ぐるしかるべきれどそれに
つけてはいとゞ今はふかうろざしのほどを
こゞろのうへなれば おぼししらずやあらんものゝ
心もかくしり給めれば さりとしとなんおもふと
まもしぬへば 雲村 のこまかふやうに抱きなるさ身にはすぎ

まろうよそのおぼしいあしめど心ましへぬ抱なげ
りしさのこうちそふや。さはこづしの形望なり
けりとて。のこりおほげなりけるひとづしげなり。
まめやかまは。いとゆくさ紀すくなきこうちすりを。
ことしもかくしてしぼがかまてすぐすは。いと
うしろめたくこそ。さ紀ぐも（お家ノ事）こさしゆかことゝ。いかで
此ゆかしあらばとこそこそ給。それ（係詞）しもおかまじき
ことまなん。さてかけもなれ給なんよまのこりてい。
なまのひかあらん。こゞかくなまとなくて。すぐる
さし月なれど。おけられのへぞてなきうれしさ
のこゝそ。ますことなく覚ゆれ。なほさふさ後こと

あるころの御どをこそてゐへとのこ罪しゐしゐ紙。
例（芸心）のことし心やましくて涸ぐこゐへるかしき紙。
いとあきれとこなりゐひて。よろづに罪しまざら
もし給。（詞）御くはあしほど。人のあ様のさりぐに
くちおしくはあしぬを。こきりゆくまくに。まことの
心ぞをおひこうにおちねこうこそ。いとうきワざ
ありかれとあん。さきてまくる。大（タ）将のもく（菱）ぞを。
おさあるりし御どにこそめて。やんごとあくて。
さしぬすぢにいさひしを。つゐにあるよりしず。
へぶてある心ちさてやこましこそ。今さへいと
おしくくやさくもあれ。又ワがあやまちのこを

あしざりやりなど心ひとつになんせひいげる。うる
さしくをもりまて。そのことのあるぬうなすと。
おぼゆることもなりき。こゝいとあまりこゝだれこそ
取なく。すくしくしく。すこしさしとやいふべかり
なんとせふには。これもしく。こゝろはまづしさし
りし人ざ夜になん。中ぎ(私好)のれもこゝやすぎなん。
さ夜ことは心ふくなまめしきこゝめしには
まづせひいでしなれど。人こゝにくらしかり
しさ夜になんありし。うしむべきふしぞ。げに
ことわりとおぼゆるふしを。やがてなぐおもひ
つめて。ふくしんぞこれしこそ。ひとうしかり

つめて、おかくしんをこれしこそ、いとゝうるしう
しかゝろゆるびなくさづくしてこれも人もうち
こゆこ、朝夕のむつびをかはさんりしも、いとゝ
ましき事のありしかば、打とけていこゝおとさるく
ことやなど、おまりつくろひしほどにやがて人ぞ
こりし中ぞうし、いとゝあるまじきんをこちて、
このあはくしくなりぬるなげきを、いうじくしひ
しめなへしが、いとおしく、げに人がしをしひしも、
口がつこあかうちしてやこにしなぐさめに、中宮を
うくさるべきれちぎりとはいひながら、とりこそ、
世のそしり、人のうしこをもしらず、心よをなるなか
の世ながらも、これをされぬらん、いまもむかしも、

なをざりなる心のすさひにいとおしくらやしき
うともおほくなんとこしらへの人のれうへすうし
づくのゆひいてゝ内のれうへのれうしろ（昭和上ノ事）こは、なる
ぞうりの程なるしずと、あなづりそめて、心やすき物に
しひしをお代心のそここしず、さいなくゆゑ事
ある人になん、うりべい人になびき、おいしうなこし
なぐしうちとけぬ気色しるにもりて、そこしうと
なくそづしき事をあれとの給へば、（紫詞）と人は
こゝろいしぬを、これはまかなしゝどをのづから
気色こゝろなりくもあるに、いとうちとけまくて、
心をづしき事を、いとうしへなさうし

心をづしきる様にうるさきを。いとゝとしへなさうし
なき様。いかにこゝろかんとつゝましかれど。女(吟若菜)は
とのづから。おぼしゆるすんとのこゝちひてなんと
のゝふ。(源ん)さぞかりめざ夜しと心をさのへりし人を。
いまはかくゆるしてこゝろうちしなどし給も。女(吟若ノ)
はのはしめの。ま心なるあまりぞうしとおぼしたる。
いとかりがたかれば。(詞)忘れてはさすがにふ夜なきまは
あらぬ物し。人によりことにしたがひ。いとよく
ふるすぢに心づかひしのひかれ。さらにこうら
これど。はの有様によるる人はなりかり。いとかしき(地根ノ事)
こそもれしのへと。御思ひて罪を給。(女三)宴にいと
よくひきさりのへりしことの。よろこびきこえん

とて、ゆゑつくりなひぬ。（女三ノ）まれに心をくく人や
あらんともおぼしたらず、いといたくわびて、ひと
へにはことに心いれておかず、（源氏）いまはいと海ゆゑ
してうちやすまをもへし。地の師に心ゆきて
とそいとゝろしかりつる日ごろのしるしありて、
うしろやすくなりぬひにかりとて、はことも、をし
やりて、おぼとのごもりぬ。（紫ノ子地）夏いまはれいのおいし（源ノ）
まさぬ夜にいとひねしたまひて、人ゝに地獄などに
ようまをて、罪をふ。（紫ノ）かく世のことひにいひあつめたる。
昔獄だにも、あぶなるおとこいろこのこゝ、ふる心あり
ひとにかくづしひたる女、かやうなることに成いひ

あつめたるまもつぬまよりうたありてこそおめれ
あやしくうきてもすぐしつる事 搭かなげにのぬへ
つるやうに人よりことなるすくせもありける身
なるに人の思ひがたくおろぬことにする地なもひ
そなれぬ身にて座やこなんとすらん何ぢきなく
もあるかなくどしひつゞけてよふけて御目との
ごもりぬるあるつきがたくより此むしをなやこゆふ
人ごとなりあつかひて此きうそこさそしさきんと
きしぬるをいとびんないことせいしたまひて
たへがたき紙なきへてあし給つ此身もぬるこそて
此心ちもいとあしかれど院もとこにつたり給ひぬ

ほどうくあんとも罪なしず。女(宿名女は)れのれうるより。(法)れせう
そこあるに。うくあやまりしくてあんと罪なしあるに。
(法)おどろきて。そあるより罪なしあるにむすつぶれ
て。いそぎつくりあるに。(法)いとくるしげまておいす
(付)いかあれこうちぞとて。さぐりまりあるへいいと
あつくおりすれば。きのふ罪なしあひしれつくし
このすぢなど。おぼしありをあて。いとおそろしく
おぼさる。れかもなどこあるにまいしきこれど。れ
らんじもいわず。日一日そひおりして。よろづにこ
まりあげき給。ちうあきれくぶ抱をぐに。(法)いと抱うく
しあひて。おきあがり給ことこして日ばへぬいか

かくんとあはれしきこぞそはいのちどまらずさへば。
もじめきせかふぞうめてはうちちぢもませ給ぞこ。
ところどもおもしろくうつくしくおもひそ。
むかしははずとうりつきずつこひ給さ庵ぐんへぞうく
らうしけありさ庵くの此つきこうざりちけれど。
ありしよりはまさりしところあれど。そのびらなどこ
まうけぢめありがたされあし。まことにいくこうろ
ばそくるうしとうきうかすまじ。しくちばされぬば。
冷泉(来ノ)のひがしきもちげまうぬ。みれ院(条)よりもかくまづ
らひ給ふしきこしめしてはいとひいとわん
ごろまでびくきこて給。おかうじ(宮ノ)さ庵まで二月も

すぎぬ。いふかぎりなくおぼしなげきて。心ゝに一所を
うへ一度をんとて。二条院にわたしまりおひ川。六条院の
うちゆすりこちてぶひなげく人おほかり。冷泉院も
こさうしめしなげく。この人うせ給ひぬ。院もかなしず
世をそむくれかいとげおひてんと。大将君なども。
心をつくしてこまりあつかひおふれずほうなどは。
おほかるのをばさりもれまて。ことはつきて。いかふ
まつらを給。いさゝかもれおぼしつくまはれ。こさこ
ゆかしと紙。さも心うくとのこうしこゝろしもの人ど。
うぎりありて。つかれまて給ひんよりもめれまへに。
祇心とやつしすて給ひんれ。資信をこそはさしく

かゝ時こゝにまじくのこゝおしくかなしかるべかれど
昔よりこづたゝぞかゝるほいふるさをとまりてさ
うざうしくおぼされん。こゝろぐるしさまひかれ
つすぐすを。さうさ殿にうちすてゝ殿もんとや
おぼしをとのこゝおしこゝきてかゝるげにいとこれこ
がゝげによりつゝ。限のさ殿にこしこゝまふおりく
おぼかゝるを。いつさ殿にもんとおぼしまどひ川。
女三宮の御方にも。あかしさ殿にはかり給ひぬ。御こと
ぞもすさ殿じくて。これひきこめられ。六条院のうちの
人ぐにこれあかゝぎり。二条院に川どひ来りて。この
六条院には。火をけちかゝるやうにて。こゝ女どちおりして

人ひ（紫）らのれけるひ女りりとこゐ。（明石君）女れのゐもけくり
あめの、ぎもろとをまこまりあろひ詞く（紫詞）ゞりも（明石君懐姫之）
おりしまさぞ。（紫ノ）おみてけるぜいとおそろしきをぞやく
まりのねとぞろしされこちまもこさてしのふ。（今上ノ女り）ほり
（廿一丈）家のいとう川くしうておりしまず。（紫ノ）こなりのても。
いうじくなまきのめて（詞）おもろび詞ゐんをえこなしまぞ
此なんこといつもれ詞もんうしとのくまへば。（明石女御）女れもさき
あへずなるしとおぼしくる。（相）ゆくしくくなおぼし
そぎうともくしういまれし詞りど。心まよりあん。
人いとをくくもわがまさそのるきういまれまは
さいなくいもそれまきくくひまぜき心わろ人もしさしか

さいたいもそれにしたがひ。まばき心ある人は。さうか
べきまで。こうき身となりても。ゆるかりゆるべ。
かるいをられ。きうなるひとは。ひさしくつゐなしぞ。
心ぬるくなぐしうなる人は。なぐさゝめしなんおほ
かりけるなど。仏神にもこのれころぞものなぐらく。
つこうなきさ夜を。おきしめさせまふ。こゝずほうの
あぐりたち。よねなどにても。ちくさふふかぐりの。
やんごとなき僧などは。いとうくおぼ（明石法ノ）しまどへるれ
けきひをさくに。いといたじく心ぐるしられば。心を
をこしていのりきゝ也。すこし（芸地）よろしこさ夜より
こしまふとき。又六日打まどつゝ。又をもりまづしひ
給こといつとなくて月日をへまふは。なをいうに

おりすべきにかゝりまじきれ心ちゝやとおぼし
なげくれもれゝけるどいひていでゝかもなしおやこ
ぬふさ面そこそくこえしず。くゞ目にそへてよりり
ぬふさ面にのこみゆれば。いともくゝかなしくいこ
じくおぼすにれこゝろのいとまもなげなり。まこと
にや柏染の縫ハ中納言になりにさうし。いまのれ世
にはいとしたうしくおぼされて。いと時の人なり。
柏ハ
のおぼしまさるにつけても。しるのかなしぬ
うれたしさをしひまびて。此文の中の二文を
なん元なりてげ。ぞらうの更衣がしにおりしま
しかれば心やすきかたまじまて。しひ笑ぬへり。人

しかれば心やすきかたまじりて心ひ罪もなへり人
がしもなんてのへにしひなずしかれば、けきひこゝ
なくおもすれど、もとよりしこゝよりしかこそ女三ノ事なる紙
ふかゝ里かれなぐさめがたきをばすてまて、人めに
とがめしかましきぞうり、もてなし罪もなへり、なる紙
かれしたるのころはもとれぬ、小侍従といふかたしひ
人は、女三宮のれしづうのめれとれむすめなる里かれ、その
めれとれあるぞ、このんの柏君のれめれとなりかれど、
もやくよりけぢかくきくなりて、まだ女三宮おさなく
おりしまして時よりいとしきこゝしになんおりします、
こゝかどのうしづさなりあつき海など、柏ノ男をさなりて、
かゝおもひもつさそめくるなりかれ、かくて院も

あはれなりしますほど人（女三ノ宮）めすくなくしめやかなん
をそしなりて小修法をもへとりつゝいとしう
うきふ（柏羽）しむしろくいのちもたえまじくおふ
ことそがりたるしつらひよすがありてありさま夜を
なさつくへがへぬ心の程をもきこしめさてみ
ましきまさしるそれさりしのなければいつしく
おんつくさ院（朱ノ雀を柏くわり語く）のうへざりまかくおぼえ（源ノ）てけく
ちくて人はまされのみやりなそひ（女三ノ）かりおほえん
こまかよれくおぼくつれぐまてもそうかゝや
おぼびとのそうしけつゝいてよも（朱ノ）すうしら（梅）ひか
聞しくいはひしこそておもしくはてへの心

やすきうしろこをさぶめんにはまめやかにけうう
まつるべきひとをこそさぶむべかりけれとの給
ひきて女二の宮の中にうしろやすく引き忍ばるべき
さ夜にて、もれしぬふなることくの給ひをけるを、
柏ノ
つゝへきこしにつとおしうも口おしうも、いかゞせひこぶ
ゑく、げにおなじ此すぢとは最も罪しなど、女二ノ事それは
それとこそおぼゆるつぎなりけれとうちうめき
ぬへば、小侍従も、小侍従詞いであなおほけなそれをそれと
さしをきなりぬて、又いかやうにかぎりなき此こゝろ
ゑんといへば、柏うちほゝゑみて、詞さそはもれは有れ、
女三
宮にかくじけなくきこしさせなよびけるさ夜も、

院(朱)も内(今上)にもきこしめしかり。などて(朱)かはさてを
さゝかはざらましとなん。これ門いでにはの給
ひをけり。いでやたゞいますらしの。れいたもりあら
ましかばなどいへば。いとかたされことなりや。清
すくをとかいふこと侍ならをもとにて。かれ院(法)
ことにいでゝ。ねんごろにきこし給ふ。たちならび
さぬたげきこしさをぬかべき。れ身のおぼしとや
おぼされし。このごろこそすこしもれくしく。
れぞの文もかくなりぬへれといへば。いかゝひ(柏仏)
なくたや(小行法)つまかなるくちごはさよ。えいひもて給ひて。
いまはよし。すぎましかたをば思ひしじや。たゞうく(柏詞)

きがるきもれ、ひまゝけぢうきほどまて、この心乃
うちよせことのもし、すこしきこしさとぬべくこそ
かりぬへ、いとおほけるき心にすべてよしこゝまん
いとおそろしかれば、せひもなれて侍りとの給へば、
小侍從詞
これよりおほけるきこころにいかゞにあらん、いとむ
くつけきことをもおぼしよりけるかなまし
まりつゝんと、もちづく、いで柏詞あなきくまく、おまり
こちこくもれをそいひなしぬふべかれ、世を
いとさゞめるきもれを、女御后もあるやうありて、
もれしぬふ女ぐひなくやに、ましてその御女三ノあり
き夜よ、おもへばいとこゝぐひなくめでこけれどうち

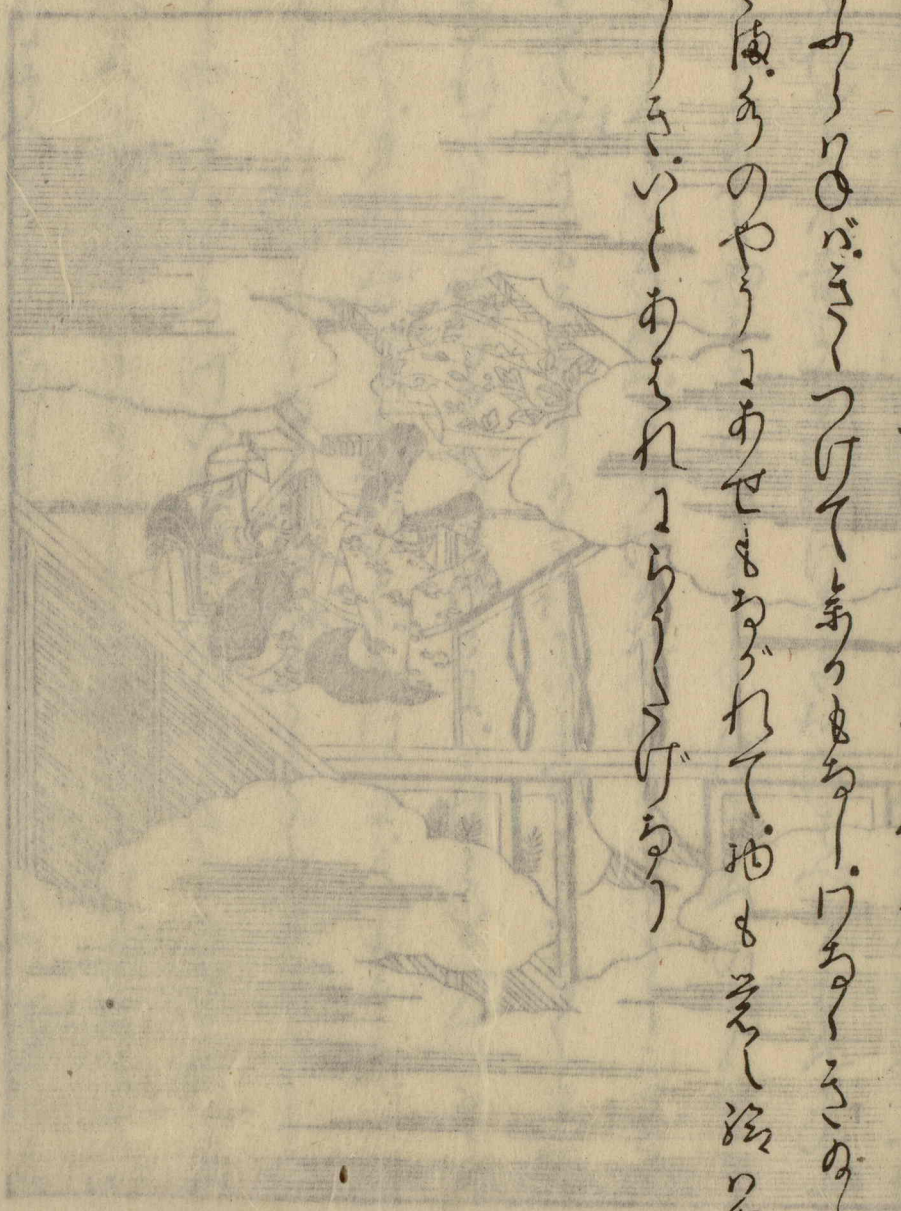
うちは心やましきまもおほかるらん。院(源)のあまたの
れ中に。又ならびなきやうにならりしきてぬひ
しに。さしもひとしからぬきはのれうらぐり
たちまじ望。めざ夜しげなることもきぬべくこそ。
いとよくきく侍りや。世中はいとつ日なき地を。ひと
きはにせひさだめて。たしたなくつなぎりなり
ことなの給そよとのぬへば。人(小侍従詞)におとされぬへる(女三)れ
ま猶とてめでたきるにあしくめぬべきにやは
侍らん。これはよれつ日のれ有猶りも侍らざめり。
たゞれうしろしなくて。たゞよそしくおりしまさん
よりは。おやざ夜にとゆづりきてぬひしかぞ。

くるまさへそむけりしまさせ給ふうらめし。
おりふしれとしめぐとまあんとぞそてくもりぬる
ごろをさ。柏よろづげなりひらしてそて詞ましとはさばかり
よるはなきれ源ノ有様をさ。まつりあるれまよる上三ノれ心より。柏ノかず
まるあつす。おやさしきされすぐてぞうちとけてれ
らんざされんとは。さしるまつるのいけぬことをあるをも。
くびとこともれごしまそでむこさつそざうりを。
あるざうりの此君のやつれまうはあるんて。御下総まも
ちるすゆをれ。わしおりつざうはとうじさら
ごとぞしつの給へふ給浅んがちずしそでいとあらもじ。さ
みとるいひさしかれ。もれめてしらぬまうへは。

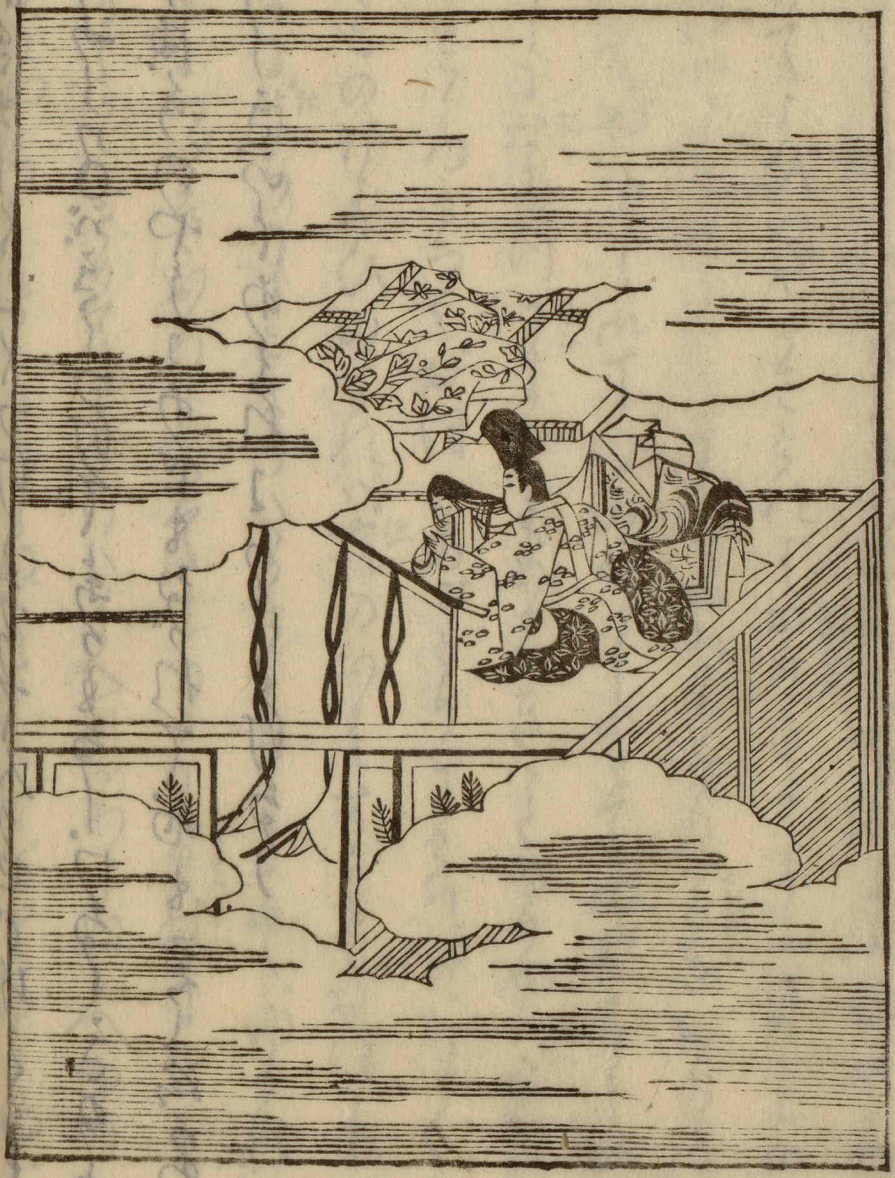
人のかく男にかへていとじくせひのまふを。えい
なびたてゞ。詞もしさりぬべきひまあらば。こばかり
侍らん。院(源)のおりしまさぬ夜に。三怪の先ぐりなり。
人おほくさゝらひて。おましのほとりなり。さるべき
ひとかならずさゝらひぬへば。いかなるありをかは
ひまをしつけ侍べからんと。日びつく来りぬ。いかに(柏ノ)
いかにとひごにをめられこうじて。さるべき(小侍従)おり
うかゞひつけて。をうそこしをうをうり。よろこび(柏ム)
ながらいとじくやつれ志のびておりしぬ。まことに
ひがころにもいとかしからぬことなれば。けぢ
かくなかくせひしぐることも。まさるべきことと

まで、せひもよらず、こゝいと目のうゝれぞのけま
ぢりを、こゝてまつりしたるのゆゑべの、あるぎよ
とゝもまゝせひいでられぬふれありさ面を、すそし
けぢくてこゝなり、せふことをもきそしせてい、
ひとゝぶりのれ色などもやこをぬひ、おそれとや
おぼしせうとぞせひけう、四月十五日げりのるす
なり、こそぎあすとて、秋院（泥とゝあり）にこそまつりぬふ、女房（女三ノ）
十二人ごとまごらうまはあしぬ、ワゝ人ゝしたんべ
などをのがぢくもれぬひけさうなどし、けく、もれ
こんとせひまうくうも、さりぐまいと面なげまて、
れ前（女三ノ）のうゝせあやうゝ人せげうしぬありなり、

ちくさゝふあぞちのきこも時ぞくよふ源中将
きめてよびいざさをかれば（あせちり）ありこうまゝこゝこの
約浮（小結浮ん）ぢりちくいさゝふありかり（小結浮ん）よきありと
しひてやなしれ丁のひんぐしおもてのおましの
ましはする（拍ん）けさまでもあるべきことなりやい（女三ん）宮ハ
ちよごろもなく（拍ん）おほとのごもりはかれば（ちく）
おとこのけちひのすれば（源）院のおもすかとおほし
こゝはうちりしこまりこゝかしきこゝをて（拍）ゆかれ
しもはいざきおろしてまつりは（女三ん）もれはをそ
ちるゝかと（拍）きめてこゝあげこまへれば（拍）おしぬ人なり
かり（拍）あやしくきてもしらぬことをそ（拍）ゆるや



うり。おやしくさくもしらぬことせをぞ買ゆるや。
あさましくむくつけくなりて。人めせどちらくを
さゝめしりのがきくつけて氣のもなし。けなくきのふ
さ後。あのやうにあせもながれて。地も荒し給はぬ
けしきいとあはれにらしたげなり



[illegible]ぬるゝ○どいとうしも常しめさるべき身とはしらぬ給
へられぞなん。昔よりおほけなきんのまぐりしをひさ
ゝるまゝめてやゝまべなましかば。うろのうちなり
くらしてすぎぬべかりけるを。中しもしきてて
さきて。院[朱]まもきこしめされましを。こよなくもて
まなれてもの給はをざりけるに。これをかけそめ
給りて。身の身ぬるゝひとゝきはに。人よりふるさ
心さしをむなしくなし給ぬることゝ。うでうし給
まし心なん。よろげいまはかひなきことゝおもふ
ぬへかへさどいかぞかりしこまぐりにけるにかさし
月にそへてくちおしくもつゝくもぬくつけくを

あまれまも。いろくにふくせふこまへまさうり。
をさうりて。かくおほけなき。さ海をゆらんぞられ
ぬるもう川はいとおもひやりなくぞつしられぞ。
つゝをもさ心もさらに侍るまじと。いひもてゆくに。
女三ム この人なりかりとおぼすに。いとめざ海しく扣
そろしくて。つゆいろ人もしら海ゆず。いとこと 拍計
をりなれど。よりこゝあしなきことにも侍らぬを。
めづらかなるさけなきは心ぞ人ならむ。いとこゝろ
うくて。中くひこゝろなるこゝろもそつき侍れ。衣と
こゝのこ海りをば。それをうけ給りてまゐてなんと。
ころ川に書しなふ。ムよそのせひやつまもいかくしく。

もれあれてこしなんもまづしくぞしたられ
なつまぐぐりもひけめくるるはしきそ
しきてけくかけくしきことはなくて・やこ
なんとしひしうどいとさぐりけるうまづし
げにはあらでなつしくらうたげにやもくと
のこゝろしかふれけもひのあてりいとじくおぼ
ゆることぞ・人に以させ給はざりけるさしくもひ
しげむる心もうきていげちもくゐてりくし
なりて・我方も母にふるさ面ならず・何とこゝて
やこなぐやとまでもひこぐれぬくぐいさくりまど
ろむとしもなき夏にこのてなしきれこのいと

らうさげまうちなきてきたるを。此家(女三)にはしんとて
けがねてきたると覚しをおましにはなしつくんと
もふ程におどろきて。いかにこゝつるゝんとおもふ。
家(女三)はいとあさましくうつくしおぼし給ひぬに。此
ふたがりて。おぼしおぼしなくをおぼ(拍詞)ゆるくのがれぬ
れすくをれ。おさうしさりけるとおぼしなを。男
づゝの心ちがしもうけしごろにはあらずなん
おぼし侍る。かれ覚しなりしうすれつまをねこの
つまびきたりし(男)のことも思ひいでたり。げに(女二)
さまたありけんよとにおしくおぼり心うきれ男
なりなり。(係)院にもいまはいでゝはこしはしんと。

かなしく心ぼそくて、いとおさなげになまさこまふを、
いとうしげなくおもれとこなりて、人の山洞をさ
へのぐふ袖を、いとゞつゆけさのこまさる、あけゆく
気色なるに、いでんかたなく中くなり、いかゞはし
侍るべき、いとゞくまくまをみへば、又きてさをん
ことも有がたき紙、あゞひとことしれこゝをこさるを
みへとよろげに罪なやますも、うるさうまびし
くて、おもてさしにいもれこ海をねば、おもてくは
むくつけくこそなり侍りぬれ、又かゝるやうはあら
じといとうしとちひ罪えて、さしばかりなり、
別をいとづらにやはなしもてぬ、いとすてがたきを

よりてこそ。かくまでも侍れ。ことひまかぎり侍り
なんもいうじくなん。つゐまでも此心ゆるし給さ面
なしが。それまゝへつゐまでもすて侍りなましとて。
かきいづきていづるに。女三ム そていいかりしけるぞと
あきれておぼさる。拍すきのまれ屋風を引ひろがて。
とをおしあけられば。ム けさ夜の南のとれまへいり
ちがまぶあきちがらあるに。まぶあけられの程なるべし。
ほのかにみなんのうろあれば。かうしをやなら
ひきあげて。詞そういとつゝきれ心よう。けし心を
うを侍りぬ。すうしちひのどめこしおぼされば。夜と
ぶまの給ものをこと。おどしきこゆるを。女三ム いとかげらか

ありとおぼして、おれもいたんとしぬへど、わなく
れて、いとけかくしこされさ面なり。あぐあけな
あけゆくに、いと心あはたゝしくて、おもれなる夏
がたりもきこしさすべきなど、かくまくまをぬへど
とて、さりともいまおぼしあはすることも侍りなん
とて、のどかならずたち出る明ぐれ秋の夜よりも
心げらしなる

拍 おきてひ夜も志られぬ明暮にいづくの
家のうら袖なる。ひきいでゝうれへきこゆれど。
いでなんとするに、女三ん すこしなぐさめ給ふ

女三 あけぐれの夜にうき男いこさしなん夢なり

なりとこそもやむべくどもなげこの給ひ忘の
けつくおりしげなるを（拍ム）さくさすやうにていでぬる
到しぬいまことに男をもなれてとまりぬる
心ちす。女家（旅家）のれもとにもまうで給ひで。大夫（11）へぞ
まゐでおりしぬる。うちつしこれどめもあらず。
ふつる夢のさぶらはあもんこともかうさなさん
ちつるかれねこのありしさ由いとこひしく
ちひいでしる。さてもいえじ云あやまちしける
男かれ。ふるあらんことそまぞゆくなりぬれと。
おそろしくそしもづしき心ちしてありきなど
もし給ひず。女（女）のれこめしさしるもいもず。けが心ち

にもいとあつまじこそといふなるにもむくつけ
くおぼゆれば、おもひのまゝにもえまぎれありかず
たとへだのすゝ
みうどのれめをもとりあやまちて、ことのきえて
あるんにかぎりおぼえんことゆへには、身のいる
づこになるんことも、うしくおぼゆまじ、しらいちだる
きつこにはあらしぶ也、此院（源）にめをそばめられなるん
ことはいとおそろしくもづしくおぼゆ、限（地）なき
女は夫衣ちゝのすゝ
せんなると男ゆれど、すこしよづきたる心ぞんまじ里、
うへはゆへありこめりしをにもしるがもぬ、しるゝ志
うろそひたるこそとあるゝとかゝるゝとそしうち
なびき心かりし給ふぐひもをそれ、これ（女三ノ事）もかゝる

心もおもしろきひとゞ。ひとをもむさま抱をだしぬへる
れ心ゆるゝ。こゝいましも人のこゝさくつけさんやうは。
夜ぢもくまづしくおぼさるれど。おろさ家ゆゑ
えぬざりいで給ひず。いと口おしき身なりけりと。身
づからおぼししるべし。女三ノおやましげるなんとみえれば
源ム
おとゞきゝぬて。いとじくれ心をいたし給れ。雲ノとてり
うちそへて。又いるとおどろきぬて。ひとり源女三ヘぬへ。
女三
そこもとくるしげなるゝともこゝし給ひず。いと
いたくもぢらひしかりて。さやかりもこゝおもせ
なり給ひぬを。ひ源ム さしくなりぬるゝ夜をこしめ
しくおぼすやといとおしくて。れ雲ノうちの

さ候ほどにきよしにて。かまへのさぢめまもるそあれ。
い候さしまそろくおさ候とくしそれしとて
うん。つらけあまりしほどうりあつくひそあて見
まちちがる。それば。うつさごろよろづなをしらぬ様
まゐらしゆりぞ。その、がうしこのほどすゝげ。こなた
そし給へんなど男のふかく気色もなく給ひあひ
いとおしく心ぐるしくおぼされて。女は人これぞ
涙ぐましくおぼさりぐんの気いもして。中にある
心ちのこまやかりて。おもひあしくらしひ
まよ。かつらの月なかば。まれ、うちあいそひゆく気運
うきつれそうひそどのかきど。おやまのしげまもて

なしてなげめかしぬへり。女家をばかしこまりをさ
たるさ海にまてなし罪て。おさくうちとけても
えしなり給ひず。我方にもなれぬて。いとつれぐに
こうちぼそくなげめ。たまへるを。ひしりべのまたる
あふひをこなて

拍 くやしくぞつゝをしけるあふひ草神の
ゆるさるなどしなしぬに。とさふもいと中々なり
世中さげなしぬ車のをとなどを。よそのことに
きて。人やすなしぬつれぐに。嘗しがたくおぼ
ゆる。女家もかゝる乳色のすきまじきもこしられ
たまへばなにごとくはさり給ひ。ほどもなくしくの

ぎ面しきに。もれおもひしくぞおぼされなる。女房
など抱きにこれいでし。へずくなるのどやかなれば。
打ちながめて。さうのことなつしくひきまさぐりて
おもしすうけくひも。さすがにあてになまに見うし
かれど。おなじ（拍ん）くはつまひときは。とこにばざりけり
すくせもと。おをおぼ也

（拍）もろかづし落葉（おちば）をなまくひろひけんなはむつ
ましさかざしなれども。とうきすさひぬるゝ。いと
なめげなるしりうごとありうし。おとじ（源ん）のきこえは。
まれく（女三）ひろりあて。えふともこちへりこ面もず
しげ心なくおぼさるしに。（紫ノ）こえいりあぬとて人まり

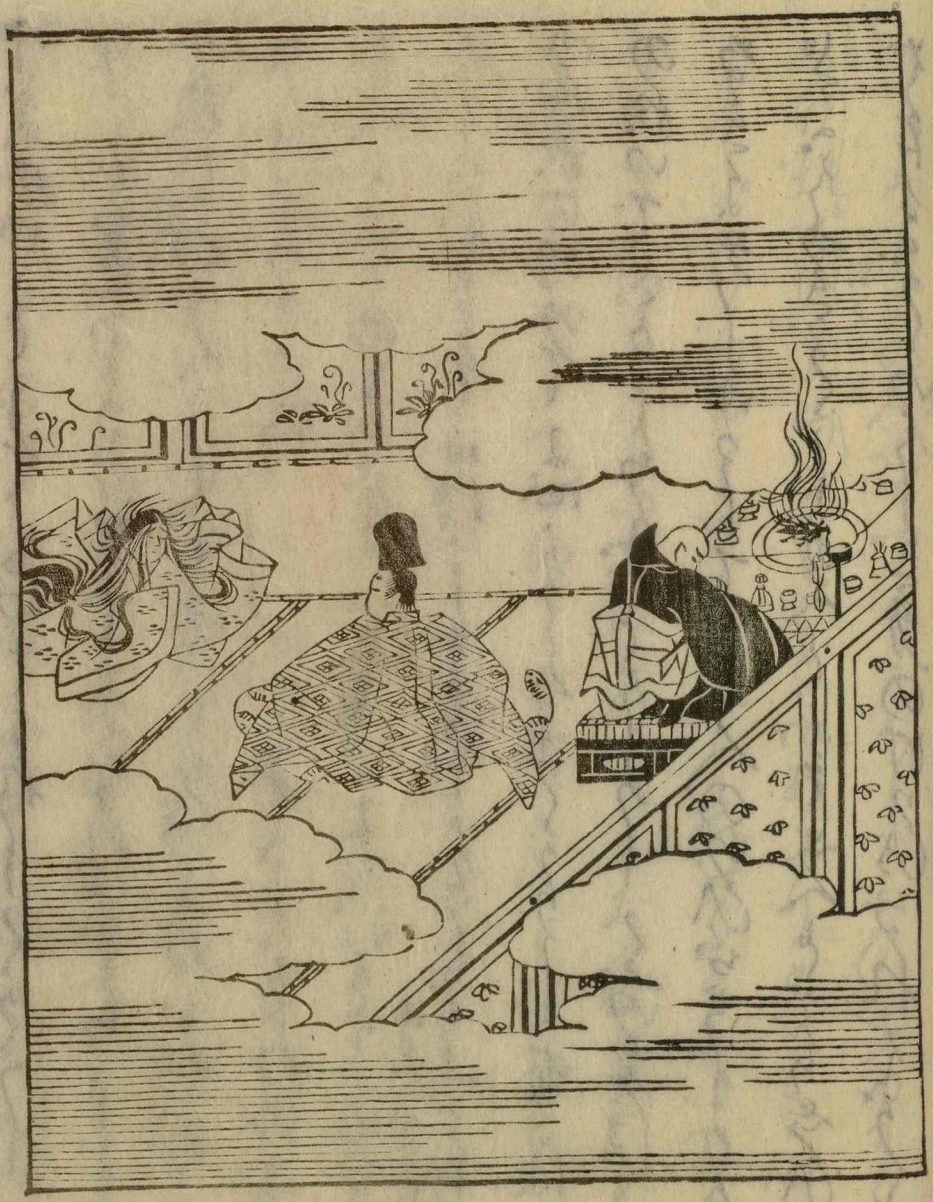
これば、さしるなるごともそしつれども、此心も
くれてつくり給ふ、こちの程の心もとなきは、げる
かれ院（二条）はほとりのおほちまでひとこちさはざこり、
とのうちなきのゝしろけもひいとまがくし、
これにもあしでいりこまへれば、日ごろをいきゝ
ひまこしぬへるを、よつるなんかくおりしますとて
さふしふかざりは、これもをくれなしじと、まどふ
さ面どもかざりなし、こずほうどものざむこぼち、
傍なども、さらべきかざりこそまゝで、ほろくと
さけぐをこ（浮）ぬふ、さ（ふ）しは限ことそこと、そしもつる
おきましさにおるごとかへこぐひあしん、さり（初）とも

もれくけのすゑまこそあしめ。いとひとゝかゝり
かさいぎそと。しげめまて。いよくいとゞき。鞋(ゲン)ぎ
をとそそへさき給。すぐれたりげんざぎの。很(うざう)もし
あつめて。うぎりあつれいのちまて。この世にき
まひぬとも。たゞいましぢしのどめまひ。不動(ふとうそん)の
れ(あんりと)なのちうひあり。その日うずをぐまうけとぐ。
六月いきのびゝるまとこへ
まりまへと。うしらより。ぬことまくろけかりを
たて。いとゞきこころをとうてうぢしまう。院(ゆん)も
たゞ今ひとたびめをこあはをたまへ。いとあへなく
うぎりありつゝん。ほどをぐまえこぎなりまけり
とれ。くやしくうまし。さをと。ぞうしまどへるさ。

とまりぬべきまもあしぬを。ミなり心ちどもしくぐ
をしきらべし。いふじきれころのうちを。仏も
ミなり給まや。月ぜさしまあしかれいでこぬ抽の
け。ちいさきつしりまうつりて。まぢひのしる祖ま。
やうくいきいでぬふまもうれしくもゆしくも
おぼしさはがる。いふじくてうをしれて。人いふれ
さりね。流ひとしころのれこしまさしん。せのれを
月ぜてうしまびさせ給がおさけなくつしかれば。
おなじくいぞしきしきんとせひつれど。さすがま
いのちもしふまじく。力をそぞきて。ぞしまぢふ法
こそてまつれば。いまこそかくいふじ。きみをうけ

されば人の心のくせにてぞ。うくまでもなり
こころあれば。ものこころざしさええずさで。
つねならざりけれど。さける志れじとならひ
つかれなとて。かきをかりそめてあかりけるひ。くゞ（涼ん）
むかしこぬひしもみちけの夜とこしぐり。おき（葵つ）
まじくむつけしと。あはれしこゝろしとの
かりしぬもゆくしそれば。げにうしいのでどう人て。
ひとゝすべて。さ夜ましくもさこゝろ絶りず。まゝしとま（涼泊）
その人かぐよろしぬきらはあやふはあるあのこは
あれこうかおきと人のおもて。かをあるこど。うひはら
もおあるどうしあるあのりさはまき人のさう

ごとんことの心まさるく思ひ出られぬべからんを
いへさてなんいさゝかにても思んずべきとのゝ後
へいはゞ（まゝ云）ほろ〳〵といふくなさて
我身こそおしぬさ後なれそれなどしそしおぼ
れすり君い君なりいとつゝしくとなきさけぶ
抱かしさすがにもれそだしころけまひかいしぞ
中（添ふ）くいとうとましく心うけれバもれいりきじと
おぼせ



中宮の御ことまでもいとうれしくかうじけ
なしとなん。おまかけまでもこなれど。こちことは
ぬれば。このうへまでもかくおぼしぬるやあらん。
なをまづうしはしとせひ申しこころのしふ
なん。とまる物なりけるそのなるまもいきてのうま。
人うりおうしておぼしまてしうりも。せふどうの
此物の御いでは心うしすまくうりし有こ夜を。
の給いでうりしなん。いとうしめしく。いまはこで
なきは見しゆるして。こと人のいひおとしめんを
ごとにはぶきかくしぬへとこそせへとぞうちせひし
ぞうりまかくいうじき男のけうひなれば。かく而

ときありこの人(ぞ)をつくまつしとさひ字ゆることは
おけれど(深く)後もりつよくいとれあるりとをき心ち
してえちかづきまいらずれと思をざるほのうま
なんきく侍るよしいまはこのつゝかろむぞうり乃
まぶ紙をさせまへずほうど程とのこゝろことを
身まはくるしくまびしきほのほとのこまつれて
さしまふうときことをきこしるがいとかるしく
なん。中(秋好)家まもこのよしをつゝへきこてまへゆめれ
こやづゝへのほどまへときしろひそのむ心ひ
給ふ。秋家まおりしましに此ほひのれつゝかろむ
べからん。くぐくのことをかるらずをさせたまへいく

ムやしきことゝなん有けるなど。いひつゝ人れど。
(添ふ)もおもしけるむかひて。物ぞし給へんもなきはらいさ
それば。(物のけと祈禱者ノ封し給ふ之)ふうじこめて。(紫)うへをば。又こと方に遣びて
けうしなり給。(地)かくうを給ふなりといふこと。世中に
こちたく。此とふらひにきたし給人ごあるを。(添ふ)いと
ゆゝしくおぼして。(地)かふのかへさこゝにいでゝなひける。
上ぞ遣ひなどかへり給こちにかく人のゆをば。いと
いうじきことにもあるかれいけるかひありけるさい
もいゞ人のひかりうしなふ日にて。なほそれぶる
なりとうちつけごとし給人もあり。又かくこゝひ
ぬる人いかなしぞえなるがめしぬことなりおもふ

さくしまといふ事ともあるいかゝ人のいとゞ
世まなびしへて。かれこれしひとつくさぎ。かさりし
の人くるしかんいまこそ二十三年にもとのれ覚し
おしかれ給いあいとおしげをされたり川るれお
げしをなど。うちさしめきなり。米(柏ん)の替。さのふいと
くしげるかりしをしひて。(条ノ後ニ之)かふいれおとうと
ども。左大弁(べん)及宰相などおくのるまのをて。
そこはひなりかくいひあへるをきくまもむかうち
つづれて。試まかうき世まひさしかるべきとうち
ずじひとりごちて。(二条ノ)かれ院へこれまいり給ふあしか
ならぬことなれば。ゆくしくやとてくらぐおほかるの

れとおもひは来りぬへるまゝかく人のなきさもけば
まことなりけりとこちさはぎぬへり。或ノ文 [illegible]の文を
けうりおそいといとくおぼしほれこうさ夜にてぞ
いり給。人ごの此をうそこもえ申しけん人ゝ夜もぞ。
大ヲ 拍 の君。泪をのごひて立出ぬへるに。いつまく。ゆく
ゑきさ夜に人の申つれば。しらじがさきことにて
なん。こゝにひさしき此なやゝ氏 [illegible] 取りなげきて来り
つゝなどの給。夕 [illegible] とまくなりて。月日へぬへるを。此
曉 [illegible] いり給へりつゝを。もれゝけのしこうに
なんなけゝ。やうくいきいで給やうに罪なし給て。
今なんこれ人心しづしめれば。まゝいとこれましけ

なしや心ぐるしきことはこそとて。風ことはいたく
なきゆへる氣色や。めをすてしもれたり。柏ム 楽つ聲。目が
あやしき心なしひまや。この夕のいとさしもしたしし
かしぬまし毋の此ことに。いたく心しめゆへるかなと。
めをとにむ。係 かくこれかれまつりゆへるよしをたし
めしてどもきひやうぶれ。はいまとぢめつるさ風
なりつるを。女房などは心もえおさめず。こぐりがは
しくさいぎ侍りけるにこづかしもえのどめず。こゝろ
あもたくしき程まてなん。ことさしはなん。かくもれ
しゆへるよろこびは。さてゆべきとのゆへり。柏ム かんしん
しいむつづれて。かるありのらうろうなしずは

えとあるまじくけもひもづしくもふも心（地）のうちぞ
もしぞくあるりる後（添ん）くいきいでもてのうちもも
おそろしく見して又こいうじきほうぜとつくし
てくもへとこゝもを給うつし（仏見ゆる）べまてごまむくつけ
うりし人のれけもひのまして世かりあやしき
地のさ後まありまへんとおぼしやるまいと心う
かれば中（秋好）父とあつかひ罪し給さへぞこのありハもの
うくいひもてゆけば女の身ハこれおもじりこふか
きもとひぞうしとおべて世中いとりしくかれ又
人もさかぞりしれなれむりしれ物ぞますそしかうり
出ぬへりしことをいひ出うりしまゝ後ことおぼし

しりよいとまづらりしくおぼさる。れぐしおろし
てんとをちよおぼしされば、いむことのちらしもや
とて、れいらぐさ、しらしがりもさえて、めらいぞうを
うけさをまり給。れいの師、いむことれをぐれこう
よし。仏よりよも、衣よこうとさことまじ、里て、人
ひろくれうたりしよそひおもて、用をしのぐひおひ
つ。ほとけをもろ心よわんじ里のら給さ海。うようし
こくおりする人もいとうくれ心まどふことよあらり
てはえしづの給りぬけざなりかり。いうなりまざ紙
してこれをすくひうけさじめまらんとのこうひう
おぼしなげくよほれぐしきまでれかりもすて

おもやを給ふたり此月などハましてそれぐし
うしぬ元の氣色に。えさしやぐ給ひ。ど。ありし
よりハすうしよろしきさ成なり。されどなをこうぶ
なやこひたり給。もれくけのつゝすくふべきひぐ。日
ごとに法華經一アづゝ。くやうぎさせ給。なまくれと
こうときひぐきさせ給。れまくしがゝ近くて。ぶごん
のこぞ經。こゝ忌こうときかぐりしてよまさ給。おし
それそめてハおりくなるしげなることゞも低
いへど。さしに此もれくけさりもてず。いとゞあひき
程ハいさもこしつゝ。いよくよもりぬへぞ。いもん
うなるくそしなげきこり。なきやうなる此こうち

まもかうゐ(添ノ)にしき後心ぐるしくミまりまて。よれ
中まなくなりなんもづが身にはさしまにおしき
ことのうちまじれどうくおぼしまどふめりを。
むなしくこちなされまゝんがいとさひぐ海なりゑべ
それにさひおこして此ゆちどいさゝかまいりけ
まや六月になりてぞときぐ此くしもうけ給
けりめづ(添ム)しくミえてまつり給にもれいとゆゝし
くて六葉院にはおゝうさ海にもえつゝり給えず。
姫(女三ム)宮にあやしかりしこと後。笑しなげきしより。
やがて例のさ海(懐姫之)にもおいをずなやましくしなんど。
おどろくしくにあしずこうちぬる月よりもの

きこしめさで、いくくあをこそこなられぬふ。かれ
人(拍ム)ハ、ワりなくせひあまりときくハ、夏のやうに
こゝてまつりけれど、家(女三ム)いつきをず、ありなきことに
そしこり。院(源)をいとじくおちきこしめへる。此心に
有(拍ノ)様も人の程も、ひとしくぐるやハあり。いくくよし
めさな夜めきこれバ、おほかたの人めにこそ、なべて
のひとにはまさりてめでらるれ。おさなくよりさる
ぐひなき此(源)有さ夜に、なしひめへる。此心なりハ
めざましくのこゝぬふほどに、かくなや(女三ノ)こゝワこり
給ハあられなり。此すくをまそありけり。此めれと
こちこゝてまつりとゞめて、院(源)のまこしを給ことも。

いとゝ海さりまなるをつぶやきうしこゝてまつる。
かくなやみのふとこさくしめしてぞ口ゝり給。女君ハ
あつくむつかしとて此ぐしすましてすゝしさりや
うまもてなしのへりおしなぐらうちやりのへりし
うばとゝまもかたるほど。つゆゑりうちふくこゝま
よふすぢもなくて。いとゝきゝおしまゆしくとして。
あ紙ゝおとろへのへるしもいろハさをましろく
うけうしげよすきゝるやうまこゆるれもぐつさ
なじよりまなくらうゝげなり。もぬけゝるむしの
うしなじのやうまぐいとゝぐよりしげよおりす。
さしれすゝ給ゝてすゝしあれゝりつる院のうち。

ぬしへなくまばげよさへこゝ也。きのふかくも
のおぼし給ひまして。心ことよつくろかれこる。やつ
こげきんざいのうちつけにこゝちよげなるを。
いぐし給ても。衣にいまゝでへにける後なるほど。
池いとすぐしげまて。たちすれたれのささけこ
れるに。葉ハいとあをやかまて。家こさしくとおの
やうにしけるを。かれこゝまへをれひとりも
もぐしげなるなるとのこまふに。おさあがりて。こ
いぐしこまへるも。いとめづしかれど。かくて
こゝてまつるこそ。夏のこゝちすれ。いとしくけ身
さへ恨とおぼゆる。おりくのありしをやと。洞を

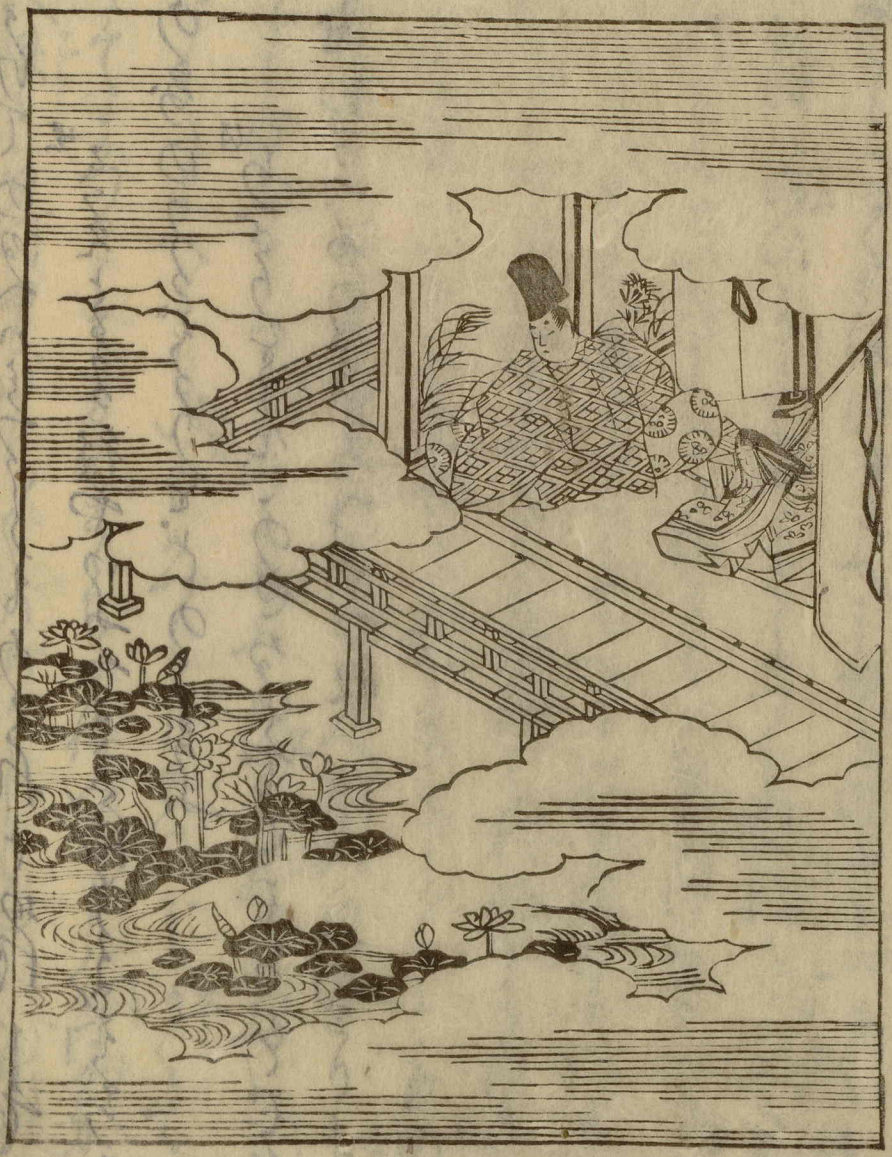
うけてのゐへバ（笑）えつくしもあるれとおぼして

（笑）こえとまる程やいふべきこと成さまはちを

の家のうるぐりをとのうまふ

（浮）ちざりをんこの世ならでもはちをだく

玉ゐるつゆのうろへぐれ



いでぬふ(ほん)かたぎ(女三)海は。もれうれど。うち(今上)なも(条)院にもこさ
うしめさん前あり。なや(女三ノ)ミ給とさくても行へぬりをめ
まちりきまうろをまどをしつゝほどゝくて
まつることもおさくなりけるり。かくるくともまま
さへやえ。こしこもしんとおぼしたちて。ま
こりあまひぬ。宮(女三ハ)は御こゝろのをとゝ。こゝえこそ
まつしんもそづしうけゝましくおぼすなり。
もれ(ほノ)などきこゝし給。御(女三ノ)いしへもきこしこまこゝねだ。
ひごろ(ほん)のけもりをさすがにさりげなくてつしと
おぼしけると心ぐるしかれば。とくこしらへ罪ゝ給。
おとなびたる人めして。御こゝちのさ海などとひ

給例のさ庵なしぬれうちよなんと、ひづらひ給れ
ぬ指をきこゆ。あやしく御ぞへて、めづらしきれす
まもとぐりのおて、れ心のうちよそ、そしごろ
へぬる人ごごまも、さうことなき後、不定なる
れことまもやとおぼさば、ことりともかくも
の給あへしらひ庵をで、こごうちなやこおへる
さ庵のいとらうこげなるをおそれとこそまつり
給、かくうしておぼしうちて、ひさりこまひし
りば、ふともえかへりこ庵ゝで、二三日おいするほど、
いかよくとうしろめたくおぼさるれど、れかこ
せのこりきひくし給、いれのまりしつも分れ

ことの紫まうあらん。いぞや座すらぬ世をもこう
なると。ひがき（女三）ことのれあやまちをしらぬ人はいふ。
約束ぞかうまつけてもむもうちさいざけるかれ
人（拍ど）もかくひろうまへりときくまおほけなく
ころあやまちして。いうじきことじも紙うき
つゞけて。をうをまへり。毎（源ノ口方ヘ）いまあらうさ風まひろ
うまへる時どまへまちりれが。悪（小約法文を）びてうをうそ
まつる。むつ（女三詞）しきまれうすることそ。いとうろう
れ。うちのいとゞあしきうとてふしまへれど。
なほ（小約法詞）こゞこのもしがきれいとあしげまおぞや
とてひろげれば。人のまいるまいとうしとて。

ミ年ひきよせてさりぬ。女三ハ いとゞむもつぶるしたり。
院(源)いりぬへだ。女三 えよくもかくし給ひで。れ志とねの
志たるさしまさし給ひ。源ハ よさりひかる二条院へ
ひたりと面りんとて。れいと面きこえ給。詞 こゝたりそ
そしうはあらずこゝ給を。紫ノ まさいとこゝよりしげ
ありしを。こすてたるやうにおもちなくも。い面
さしよいとおしくてなん。ひがくしくきこえ
なすひとありとも。ゆめこころをきたまふな。い面こ
なをし給てんとかたらひ給れ。女三ノ いはな面いまけなき
たまふれごとなども。うちとけきこえしたまふを。
いくつ志めりて。きやかりもこありをたてまつり

と海ちぬをさぐられうしめしきれ乱色とこころえ
おふひるれおましまうちふしまて此地がくりなど
罪ち給程まられまりすうしおほとれごもりいり
まけるまに日ぐらしの茶やなくまおどろさまて
さしが風こどくしかぬ程まとて此ぞなどなり
なをす月待て其いふなる地をとゞとけるやかなる
さ海しての給はまくうぐすうしきまはもとやおほ
すと心ぐらしげる笑してこちとまるこまふ
ゆふ家に袖ぬらをとや日ぐらしのなくを
きくおさてゆらんかこなりなる此こころま
まるをていひいでおへるもらうさければつい(源)おて

あかくらしやとうちなげきぬふ

まつ(ほ)ゐともいうじきくらんうらぐまこころ
さはが寸目ぐらしのくるなどぬぼしやすらひて
ゐ後なさけなくらんもこころぐらしかれば、とまり
ぬぬ、しづ心なくさすがよながめられぬて、れらぐ抽
ぐらりまいりなどして、おほとのごもりぬ、まぐあき
すじこの程まつうり給へんとて、ぐくおさ給、よべの
(前ゐん)うらぼりをおとして、これは風ぬるくこそあり
かれとて、れあふぎどきぬて、きのふうてわし給
へりし、おましのあくりどうちとまりてこぬふよれ
しらものすらしまよひとるつまよりおきこどりの

うすやうなるふこのぞしまきこうもしこゆらを
ちよ心もなくひきいでくれらんずるにおとこのて
ちりかこのうちどいとえんにゝとさらめさらら
かきざ面なりふるかさるにこ面ぐとかきこうを
こぬふにまぎらべさるさなくこ人のまちりかりと
こうまひ川れうぐこなどあけてまいしする人を
れこ給文にそいと心もしらぬにお給法こうけて
きのふのふこのいろとこうにゝといこじくむる
つぶくとなる心ちす（添ノ）れうもちどまいるかたり
めもこやしず（小給法ガ）いでさりともそれにはあらじいと
いこじくさることはありなんやうくし（女三ノ）こまひて

げんとこひちす。女三家はなるぞろもあて。又おほとの
ごもれり。源ゐおないたけなかうもれをちらしあて。
まれちらぬ人もえつけたてましかばとおぼすも心
をうりしてされがよいとむげにうろうにくさ
うろなきは宿徳をうしろめたしとはこゝな
りしとおぼすいでなひぬれバひとぐすてし
おぐれぬるに侍従よりて。小侍従詞きのふのもれをいるに
ささせなてしけき院源のはしんじ川なふみ岩
色しそよて侍つれとさしぬれバ。女三ゐおきましと見し
ておうぎのうぐいでよいでくれバ。小侍従ゐいとおしきもれ
うしいふかひなれはさ海やとしてまつうぐ詞

ほうはをうを給てしひとぐのまいりしまことあり
がなまちくさかしもじとさばうりのいろ紙
ぶまうろのをまくさり給しをいつ(添ノ)せ給し程に
すこし御ぐへ給ましをうくさせこまひ川こんと
なん。もふぬへしときゝぬれば。いさ(女三詞)とよこし御
どまいり給しうば。あともえなきあへで。さし
もきこしをまきれまうりとの給ま。いと(小侍従ム)きこえん
うこなしよりてこれがいげくのうはあしん。おな(詞)
いこじ。れ君(拍)もいといくをぢまじうりてそしさ
まてもまりさうせ給こと。ゆらがとうしこまり。冥
ぬひしまれを。御ぐぐまへぜ。うることのいで

まうでくらよ。すべていきけなきれありさ雨まで。
人まもしさを給かれば。どしごろさぞらりけれ
ぞくうしくこいひつたり給しうどうくまでこふ
ぬへしはとかれ。夏がれこあまを。いとおしく侍
べきことくぞうりまなく男色。地ころやすくつく
おりすれば。なれまてしこうなあり。女三いくへましこ雨
まで。ぞうなきるのこぞなき給。いとなやましげまて。
家ぞうりの地もきてしめきれぞ。女三ノ女房ぞノ心詞うくなやましく
をさせぬふと。添ノこをきこそまつりなて。い雨もおこ
こりまて給まこる。紫ノれあけくひりこころをいれ
こまへるこしくつしくおもひいふ。添心おとじもこの

ふきのな紙あやしく書ばさられど。ひとこゝぬかさ
まてうちくへしつゝこゝ給。さふしふ人どのなかり。
かれ中納言（拍）のてゝ以こゝろまして。かさしなかと
まで書ばしられど。こゝ（みゝ）をばづかひきらくとまがう
べくもあらぬことどもあり。としをへてもひつゝり
けることの。こゝ面さうるほひかなひて心やまからぬ
すぢをかきけれしこゝことばいとこゝどころありて
衣なれど。いとうくさやかまはかくべしやおくら
人のふこをとそ。もひやりなくかさけれ。おちな
こともこそとおひしかば。昔かやうにこゝ面かなかべき
ありふしまもことそぎつくこそかさまぎしけし

しが人のかきらうはかきつぎありかりと
かれひ拍との心をさへこおとし給ひさてもこの人女三
をばいかにもてなし罪ゆべきめづらしきき海のれ
心ちもかかることのまぎれまてありかりいであか
ころうやかく人づてなるぞうきことをしかく
ありしなかにしてまつらんよと口がれこころ
なかしまえ物もひなをすまじくおぼゆりをなる
ざりのすさひとしたじめより心をとどめぬ人ぞる
又しとぎ海の心をくらんとしかれ心づきなくしひ
へぞてしらをましてこれはさ海くとるおぼけか
きん拍の心まもありけるれ みかどのれ発をる

あやまつ事ぐひ昔もありかれどそれは又いふる
ことなり定づかへといひてこれも人もおなじ考
なれつゝうまつる程にそれづゝさるべきかたに
つけては心をうたしそめ地のまざれおほかりぬ
べきわざなり女はかふいとゝいへどとあるすぢかく
なかるにつけてかゝほなる人もありうろだせ
かるしずをもかゝぬうちまじまておもはずなる
こともあれどおほろけのさぶかるあやまち深く
ぬほどはさてもまじらふやうもあらんにしふと
しもあらはなるぬまざれありぬべしかくだかり
又なきさ後にもてなし深くてうちくのこゝろ

ざしひくるさよりも、いろうしくうらしけるさ
もれは、ふひもぐくまん人をきそ、うらくとも
文はうぐひおしじと、つまもじきをしれ給、たとへバのるゝ こうどさ
きゝもれど、うじするをは、おほやけぎ海のうろぢ人
ぢうりまて、家づくへのほども抱すき海じきは、心
ざしあるきはうしのねぎごとはるびきをのが
ぢて衣をつくしこすぐしがるきぬりのいふへをも
いひそめ、ぢのんは心かよひそむしんなりしも、
おるじそしかしぬすぢなれど、よろうさありや、まが
力ながしもさばかりの人は、心まけぬかべくも、そく
ぬをとゝいと心づきなけれど、又そしきはいぐすべき

ことにもあらずなど、おぼしこぐるくにつけて、相帝 お院
のうへもかくれこころにはしろしめしてや、しらず
がほをいろこさせ給へん、おもへば生世のことこそは
いとおそろしくもまじきあやまちなれと、ちかさ
ゑあしをおぼすなぞ、こひの山 語(ぢ)はえもどくまじこさ
れ心まじ、まけるつれなしいろりあへど、あれおぼし
こゝろくさ南の志るなれば、女(紫ん)ぞこさしのこゝろいと
おしこる、つらり(源ノ女三ヘ)あて、へやりなしず心ぐるしう、ぞひ(源ノ女三を)
やまさそし給にやと、笑(紫ノ)して、心(詞)ちいよろしくなり
まて給を、あれ女(女三)のなやましげにおりすらんにとく
つらり(源ノ紫ヘ)給ましこそ、いとおしなれとこそ、あへぬ。

流行さうし。例ならずこえこまひしかどことなる心
ちまもおもちゐぞ。なれづゝ心のどかなせひて
なん。今上うちよりはこびくれつゝひあるなり。かふも
れゝこありけとか。坡院(朱)のいとやんごとなくきこえ
つけぬへれば。うへもかくおぼしさかぬべし。すこし
をろかなるどもあらんもこゝろくるゝおぼさん
ことのいとおしきぞやとて。うめきぬへば。紫行今上うちの
きこしめさんよりも。女三ノ ぞうしめしとせきこえ
こ海りんこそは心ぐるしかしかれ。まれもおぼし
とがめずとも。よりしぬき海ありきこしなす人ぐ。必
あらんとせんばいとくるしくなりなどのたまへば

けはあるがちにもふ人のこゝろは見ぐらりしさ
よりがなれどよろげまたどりかうさくと、とや
うくやと思ひよそ人のもちんころさへもひめぐら
さるを見いたゞこくつうの御心やなさ給ちんと
おうりをおぐりんいあさ紀こうちぞしけると思く
思ひてのこまひまぎらり寸つたり給りんことは、もう
ともまうへりてを心のどうるあらんとのこゝろ
給なこゝ（濫詞）にはしぎし心やすくて給らん、まづ見たり
まて人の御心もなぐさこゝなん程にをとゝ見かりし
ぬ御ほどる日げへぬひめ家（女三ム）いかくつたり給ちぬ
日ごろのかうも人の御つゝきのこゝ思ばすを、いまは

まゝがれをうちまぎてかくなりぬるとおぼすは
院のきこしめしつけているおぼしめさんと世中
つましくなんかれ人(拍)もいこじげうしのこいひ
ひれども小侍従もまづらしくおもひなげきて
うらことなんありしとつげてげれば(拍)いとあさ
ましくいけのほどはさることいできけんかしな
ことはありふれがをのづから気色にても申り出る
やうもやとせひしぶるいとゞつくましく見る
めつきさるやうは見てしをおしてさだかりこぶふ
べくもあらざりしことぞをこなてぞんまづしく
かくじけなくかくはしいつきさる朝夕すぐこうも

あさはなれど、力もしぬる心ちして、いたんかたなく
おぼゆ。さしぬまめごとにもあざことにもめしまつ
ちし、ありなれつるもの氏、人よりは二海やかりお
ぼしとじめこうれかしきの、衰りなつしき氏。
あさましくおぼけあさきもれに心をれなりては。
いかでかはめをもこあれをさてまいしんさりとて
かきこしぼのめきしましざしんも、人めあやしくかれ
れ心にもおぼしあもきんことのいうじさなど、やせ
かしずこふにこうちもいとなやましくて、うち人も
しましずさしてをもきつこにはあるべきなしれど。
外のいるづしに此ぬる心ちすれば、されがよとかい

もりが心も、いとつらくおぼゆ、いでやまげやうに心
まくきけまひこしこ海ぬ[女三ノ詞]りぞや、まげかれ
こすのまぶ海も、さるべきことうは、うるぐしと、
[夕]大ねのさひのへる気色こしきしなど、いまぞさひ
ありすり、[地]さねて心とをさひさ海さんとさふうる
まて、おながちにおんつけましまほさきにやあらん、
よきやうとても、おまりひるをもむきに、おほとうに、
あてなる人は、よれ有様もさらず、かけさふらふ人に
心をさ給ことも、おくてうくいとおしきれ[女三ノ]男のこゝめも、
[柏]人のこゝめも、いうじきことにもあるうまとうれ[女三ノ懐姫ノ詞]れこ
との心ぐるしさも、[柏ノ]えおもひもあるれ給ひず、[女三ノ詞]えは

いとらうたげにて、なやこつたり給さ夜の、れいと
心ぐるしく、(涙ム)かくこひもちちぬふまつけてハ、あや
まくりうきまぎれぬこひしされ、ふるしくおぼ
さるれバ、つたりなてこまりぬふまつけても、むな
いたくいとおしくおぼさるれいのりなどさ夜ぐに
をさせ給、おぼかたのことハありしまかりしず、中こ
いたりしくやんごとなくもてなしきこゆるさうま紙
まし給、かぜかくうちかたしひきこえ給、ちまね、いと
こまなくれ心へぐこ里てかたりしいたかれば、人め
ぢかりをめやすくもてなして、常しのみこぐるくに、
この れ心のうちしもぞふるしかりけるさうこと

こゝろともあらりしきてて給もぬ。ほ（女三ん）ぐけうしいと
けりなくおぼしこゝろさ海も心おさなし。いと（ほん）くおい
すりけぞうし。よさやうといひおぼし。おまり心
もとなくをくれこゝろ。されもしげなきけぎなりと
おぼする。世中なべてうしろめたく。女（内石ぬ）のあまり
やうかなをびれのへるこそ。やうまこゝろかけ
ることえん人ハ。まして心こゞれなんかし。女もうう
もろけ所なくなよびこゝろを。人もあなづらりしき
まや。さうまじこさまふとめとまり心づよかしぬあや
まちハ。志いづかなりくりとおぼして。右のおとゞ（ひげぎ）の
小方（む）のどりこてこゝろうしろこもなく。おさなくより

もれもうるさよに。さすらふ事やうまでおひいで給
れど。うどくしてらうありて。これをおほかる
にはおやめさしうど。よくき心のそいぬにもあら
ざりしを。なぐしかにつれなくもてなしてすぐし。
このおとゞのさうむぞんの女房に。心あもをていり
さうりけんにも。けぎやかにもてもなれうる事を。
人にもえしられことさらにゆるされうる事様に
しなして。ワが心とつゝあるにはなさずありし
など。いまさへばいかにうどあることなりけり。ちぎり
かうきなるなりなれば。なぐくなりてこもうんことは。
とてもなくてもおなじごとおしまし地から。心もて

ましゝとゝも世人もさひいでゞすうしゝなぐ
志きさひくるゝなまし。いといたくもそなしてし
まぎなりと。おぼしいづ二条のないしのかん志勝
をばなる紙ゝらぎさひいで罪しぬんどかくうしあめ
ゝきすぢのゝとうさもれは常しきりてかれ此心
よるさもすうしかくさひなされぬひかり。つねは
此ほいのゝとしぬてぞりとこゝゝぬてはいと哀は
くちなしくれ心うごきてまづとふらひきこゝし給。
いまなんとぞはにほりし給はざりけるけしき紙。
あさからずきこゝし給
あまの世をよそはきうめやすまれうしは

もしほされしもされなしなくは。さ海ぐなる
世のさぶめなさ紙。こころはおもひつめて。いまんで
をられきこてぬるくちおしさ紙。笑しすて何とも。
さりがたきれ思ふのうちにはまげとそ。ひと哀に
なんなど。おほく罪しうまへり。こく笑しうちにし
ことなれど。この御さ海さげにかくづらひて。人には
思ふあらはし給ふぬことなれど。心のうちあはれに。
昔よりつらきれちぎりを。さすがにあさくしも
おぼしたられぬなど。かさぐにおぼし出らる。御返
いまはかくしも。かよふまじきれふこのとぢめと
おぼさば。哀にて。こころとぐめてうき給。すこつきなど

いとおかし。つ〇(多ノ行)なき世とは男ひとつはのこしたり給
ましをなくれぬとの給ひをこゝろになん。げかり
(賜)あまぶ〇はいかゞもしひとくれけんあるしの
海にいさりをし君。思ふうにはあま〇きゝこそても
いかゞもとあり。(地)うき河低まびのゝこゝにて。しきこゝに
さしゐくるれいのことなれど。いたくすぐしたる
ふでづかひなをかりがたくおかしげなり。二条院に
おかしますほどにて。(法)如君にも。いまはむげにこゝ
ぬることにて。こゝを出り給。(添詞)いといたくこそもげかし
められたれげに心づきなしや。さ雨ぐに心ばそき
よれ中の方法をよくこすぐしつゝやうなるに。

あべてのよれことまてもちゐく抱をいひかりし
ときぐによりきて義をもちり。ゆへをもすぐさず。
よそあるゞらのむつびかちしのべき人は。秋(槿)院と
この忘(勝)ととそはのうりありつるをかくこれそむさ
ちてしさい(槿)院ちる。いうじうのとめて。まざれあく
をこちひましこ給まるなり。祝こゝらの人のあ猶を
ゆゑ中にあらくしふさ夜にさすがにあるかしさ
ことの。かの人のれあずらひまぐにをあらざりけり
れ。女ごをおかしそんことに。いとうるうるべき
けざ女なり。すくをあるどいふらんもれはめにこゝぬ
けざまて。おやの心にまをがうし。おひたらん猶の

こころづかひもおをちからいるべかめるよくこそ
わまたうたぐに心をこぞるまじき鞅(ちぎり)なりけれ
としふるいたらざりしほどよりさうぐしの
けぶやさ面ぐにこましかばとなんおげかしき
おりくありしけ(女一文)ふやを心しておかしくて
なりぬへ女(四名女法)れもものこころをかくしり給ほど
なしでかくいとまなきまじらひをしぬへがなま
ごとも心もとなきうたまぞ抱しぬふん。こころち
なんおをあくかぎり(あくまでとのこと)ひとまてんつるまじくて世紙
のどかにすづし給ちんにうしろめたうまじき
こころぎをつけまほしきまぎなりける。限ありて。

とさ面かうざ面のうしろまうろ　三十八十八　こ人ハなの
づしそれまもらすけられぬるなどきそしまへだ
宗詞　ちかぐしささ面のれうしろまらずとも　よ
ぬぐらんかぎりハ三年ぬやうあらじとせふ紙
いかるんとてお紙もれをころぼそげまて　ぐく
心ままうきて　どこなひをもとぐこほりなくし給
人ぐをうしやましくせひ罪しまへりうん　添詞　の　勝　恵
さ面かりまへらんさうぞくなど　まぶ毎ちなれぬ
ほどはとつらふべき紙　けさなどはいつまぬふ抽ぞ
それをさせまへ　ひとくぐりハ六条のひんじの
花ちり　恵まもれしつけん　うかりしきほうぶくぐちてハ

うたてこゝろめもけうとうるべし。さすがにそのこゝろ
ぢへこまをてをなど男し給。あをまびのひとくだりを。
(紫)うしまはをさせ給。つゝもどころの人めして。思びて
あまのれぐどものうるべきも。しめのゝ雨ゝ寸れ
しとゆ。うはむしろ。麻風本丁などのことも。いと思びて
ひさとがましくいそがを給ける。(比)うくてやまれ
(朱)ミうどのれ笑ものびて。秋とありしを八月も
(夕)大将のれ(蒙ノ)き月まで。がくそのことをこゝろひゝ雨
ゆんに。ひんなるべしれ月は院(朱)のお月(聖品)ぞさ記乃
うれ給ましつきなれば。十月まで(源ノ)笑しまうゝろ
を娘(女三)宮いゝくなやこゝのへば。又のびぬ。(柏)氷つ春のれあづ

りの家なん。その月には来り給ける。おほきおとゞ
ねこちて。いかしくて面かは抽のきよしぞしきを
けらしゐへりかん。かんの光も。そのつねでまぞ也ひ
とこしていで給ける。おをなやましくれいなるぞ。
やまひづきてのこすぐし給。女三もうちもへて抽を
つまし。いとおしとのこおぼしなげくけまや
あくんづきおほくかきなり給まくは。いとくるし
げにおいしませば。院は心うしとさひこさえて給うさ
こそあれいとらうたげにあえかなるさ面して。く
なやこはたりぬ後。いかにおいきんとなげうしくて。
さ面ぐにおぼしなげくれいのりなど。ことしは

まぐされおほくてすぐし給ふ山(三朱ム)まもさうしめして
らうたくぞ思しとせひ罪ゝ給つきげかくほかく
まて(源ノ女三)ひたり給こともおさくおさやうり。ひとれ
そうしそれがいかなるようとれむすつぶれて世
中もいまさらようしめしくおぼして。(紫)ふいの
うるのひづらひけるころはお後そのあけかひまと
きうしめしてぐまお後やすかしぐりしをそのくち
(源ノ女)おをりがたくおしし給ふんはその比ほひ(女三ハ)就んおさ
ことや出きたりけん。(女三ノ)ふつうしたり給ことおしるほど。
よかしぬけうしろうしどもの心まて。いかなることか
ありけんようちひたりおどのふやびをかはすべき

あるくひあるどまも。そしうぎうきことひひいづる
しづひも。きこゆりしとさへ。笑しよるも。うまやる
あること。笑し。猶し世あれど。あ紙これこちハ
よあれがるくて。女三 ゆゑまれふこゝ海やうまてあけるを。
源 おとゞおりしますほどまてこ給。そのことくあくて。
しばくもきこゝぬほどに。おぼつゝあくてのこ。
こし月のすづるあん衰ありけり。あやこ給ある
さ海はうちしくきこしのち。ねんずれつゐでまも。
しひやしるくはいりゞ世中さびしく。おもしろぎ
あることあるとも。思ひすづしうまへうゝめしげ
あるそしこさあど。おぼろけまてこしりがかに。ほのめ

なす。いとしれをくれたるわざなんなど。をしへ
笑ぬへり。いとくおしくころぐるしく。うゝ
うちくのあさましきをば。さてしめすべきなは
あしで。けがをしたりは。おひなくのこゝろおぼせ
らんことをとゞりおぼしつゞけて。この御ありをば
いかゞ笑給。心くるしきれせうそこは。まろこそ
いとくるしかれ。おもはずなりせひきてゆること
ありとも。をろかな人のことがむどりは。あしじと
こそせひ侍れ。こゝが笑したるよかあんとのぬしは。
女三
まちぐしひて。そむきぬへるれすぐるも。いとらうたげ
なり。いたくおもやきて。もれせひくろしたまへる。

いとゞあてまおりし。いと（源行）おさなきれこゝろぞ人をこ
をきまて。いとゝはうしろめたがりきこし給ひ
なりと。せひあるをなれば。いまより後もよろづに
なんかうまでもいそ罪しじとせんど。うへ（朱）の御
心にそむくときこしめすらんこと。やすからず
いぶきさ紙。こゝまぐに罪しきこをでやはてなん
いたりすくなくこ（拍ノ子）人のきこしなすらこりのこ。
よるべかめる御心（全三ノ）はこゝじをろかにあさ紙とれこ
おぼし。又いまはこゝなくさぐ（源ノ）すぎにこゝろ御猶も
あなづらしくめなれてのこみなし給こんも。
うたゞにこゝちおしくもこれこゝもおぼゆる紙

院(朱)のおもしまさん 祖はお後ころおさめてかれ
おぼしをさてこるやうありけん。さだすぎびとをも
おなじくなずしへきてしていろくなかるめ給そ
いましへよりほいふきこちまも。こどりうすかる
べきかぐるまごまこれせひをくれつゝ。いとぬるさ
ことおほかる後。こづしの心まは。なまぢりせひ
まうふべきまはあしひど。いまいとすて給けんよれ。
うせろこまをきゐへる心ぢんのおもれまうれし
かりしを。ひきつぐきあしそひこさしゆるやうまて。
おなじさ雨まこすてなんことれ。おんなくおぼ
されんまつこそなんころぐるしとおもへしし

人ぞもいまはかけとゞめらるゝほどしぞりなるも
侍らず。女(昭君ノ)はもうくてゆくすゑもしりがたけれど
こゝろちりずそひ給めれば、こゝげうしのよぶこのど
けくもとこゝをさ川べしその外へられもくあらんに
しるかひてもろともに身をすてんもおしうる
まじきよもひどもにありこゝろをやうく涼(まだ)しく
しひ侍院(朱)のれよれ御り久しくもおいをじいとあづ
しくいとゞ成まさりなて拙心ぼそげにのこ覚し
ゝるに今更におもはずなるれなもり思ひて、れ心
こゝろ給ふこの世もいとやすしことにもあらず。
のちのよのれこちのさ成、げなんもつゝいと

おそろしからんなど。まゆまそのことくはあらし給
ちるど。つくづくと思しつゞけ給ふ。女三 涙のこぼれ川。
口きよもあらずせひきこそおはすれば。源 これもうち
なさなて。詞 人のうへまでも。もどうしくきてせひし
ゆゑ人のさうさしよ。身ようちうことまこそ。いつる
うこそのおきなやと。むつかしくうつさ給ひ心そふ
らんとまぢ給つゝ。此祝ひきよをなて。まづらなし
すり。かこそりまうちひうをなりこまへど。女三ノ 此ても
わなこまて。えうき給はず。源心 此二海ゑ。柏ノ 也るは。
いとうくしもつまず。うよもし給らんうしと
おぼしやるよ。いとまくそれば。よろ川の衣もさめぬ

べくれどことどもなどをしへてうをなり給。(源司 女三ノ系ニ)
もんことにこれつきうくてすぐぬ。(祚北月)二の宮のれいさ
(蔭業)
ほひことまて来り給けるを。ふるめしきれ勤ざ(懐妊ノ事)
まてこちなるびがほなんもはぐりあるこち
しけり。(紫)月もこづくの忌月(相帯)なり。さしのおもり
もるいともれさはがしまるいとこれ(女三ノ宮いまんノ事)れすぐるも
こづくしくまちこ給もんをとしさひ給れどさりとて
さのこのぶべきことまやはむつしくもれなげし
こぶれずおきしうまもてなしまてこれいくくおも
やきぬへるつくろひぬへなどいとらうくしとさす
がまこなり給。(柏地)(楽)をばなまさ(ぬ)のことまもゆん

あんくさありふしまはあるしすことさしままつり
給つゝの給ともあはをしをこゝてさるれをうそこ
もなし人（ほん）あやしとせふくんとおぼをどこんまつけ
てもいとゞおれぐしきうこまづしくこんまは
まる我心もこゞあるぞやとおぼしゝ人されいゝ
やゞてつきごろ来り給ひぬをもとゞめなし。おほ
うこの人はお紙例ならずなやこゝにうりて院（文集）まもる。
れあそびなどなきとしなればとのこゝせひにうを。
大（タん）将の君ぞあるやうあることなるべし。すき（柏ノ子）もれも
さこめて。けゞ乱色（たこのすゑ）とりしことまは。せれぞぬまや
ありけんとせひよれど。いとうくさゞうまありなき

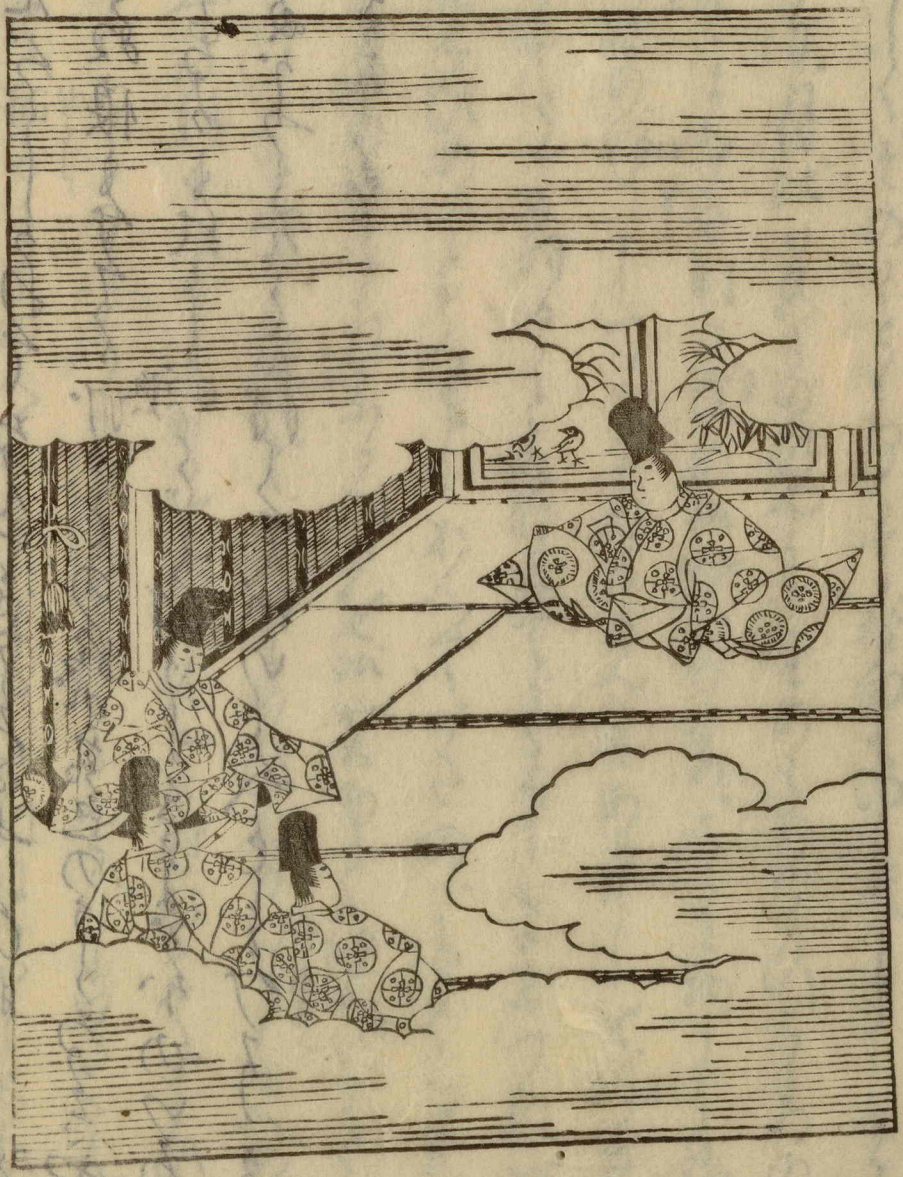
さ海なるんとはせひより始いざりなり。十二月は此
まなり。十よ日とさぶめて。まひどもなるし。とれく
うちゆすりてのくしろ。二条院のうへいまぶ。ひたり
こ後いざりけるを。これしぐくよりてぞえしげめ
とてぐ。ひたりぬへる。如此の君も罪よおりします。
ひこびのみこいへ。又おとこまてなんおりしましけ。
すぎくいとおりしげまておりするを。明暮もて
あそびなり始まなん。すづるよもひのしるし。これ
しくおぼされけるしぐくは右大臣殿の小のうこも
ひたりぬへり。大将の君。うしさしのまちまて。まづ
うちくまてうぐくのやうは。明暮あそびなるし

給はれば、かれ（花ち）はうたて、おまへ（源ノ）のまれはこゝ給はず。
柏 梁の釐を、（源ム）うらことれ、ありも、まじらりせざらんは。
いとゝへなくさりぐしうるべき。うちまを（源ノ内ノ事と云ヒ）ひと
あやしとうたふさぬべきことなれば、まりなべき
よしありけるを、（柏ノ）ともくまづらふよしやてまいらず。
さらはそこもとくらしげなるやまひにもあらぎ
なるを、（源ム）さふ心のあるまやと心ぐるしくおぼして。
とりつきて、はせうそこ、いかゞす。ちくおとゞも（れ）など（詞）
かへさひやされけるひがくしさやうに。（源）院にも
きこしめさんを、おどろくしさやまひにもあらず。
さすけて、まりなへとそゞのし給にうくうさのて

のまへれば、(柏ハ)らしとおもふく、まりぬ。よ遅うなど
も、まゐ川どひ給ひぬほど成り。例のけぢうき
ふ寺のうちにいれ(柏と)まて、もやのふ寺おろしておりし
ます。げ(柏ノ柳を源ノ大臣ハ)にいとゝやをくりあをこえて。例も
かうりかまちやぞうかるは、おさうとの恵ぐち
にいもてけられて、いとようはきがほに、しづめたる
さ夜ぞことなりを、いとゞしげめてさふらひぬふ
さ夜。などかはみちうちのれうるいらにさしなんぐ
うらんに。さしにとがあまじきを。うぐことのさ夜の
られもくいとしひやりなきこそいとつこゆかし
がるゝれなどれめとまれど。さりげなくいとなつ

うしく。そのことゝなくて。對面もいと久しく。故ま
なり。月ばいゝ多くのびやうぶをのこしおつひ。うゝろの
いとまなき程に。院の御賀のこゝろ。うゝに拙し給
十三
みこの。ほうじつうまつりなべくありしを。月こえ
つきとぐこほうことしげくて。かくこしもをあつれば。
えしひのごとくもしあへで。かゝのごとくなん。
いもねの御もち。家るべきを。御賀などいへば。こと
ことしきやうなれど。いへにおひ。ぢつ。ほうしたべの。
かずおほくなりにけるを。御らんぜさせむとて。まひ
などなりしたじめし。それことをぶにつゝさん
とて。栢子とくのへんことまゝこれにかいとせひ

先ぐしかねてあんづきごろとふしひ抱し給
れぬ恨もすてゝげらとの給ひ気色のうしあるさや
うあるもれかしいとゞもげりしきよかかのいろ
多がふしんとおぼしてれいしへもとみすりえ
をこうしきと



なげかるべく。尤しなやむ此ことうけ度りなげ
き給りなげし。其の比ほひより。例もワづらひ給。ぞぞり
肺氣かつけのるゝ
くひやうといふ物。取たくをうりワづらひ給て。たゞぐ
しくかうろうことも給らず。なげにそへて志げこ
給りてなん。門(今上)などにも来らず。世中給ことゝやう
にてこもり給。僥(朱)のれよもひこゝ給ひしなり。人より
さぶらはかぞへなりつゝまつるべきなし。ちじの
おとゞおもひをよびやされしを。かうかりをかけ。
車をおしまず捨てし身にて。すこしつゝまつ
忌産ノなきとこ
らんにつく取なし。げにドらうなりとも。おなじごと。
柏ノ子早下之
かうき取給らん。其心ばらんぞられよと。もよほしや

さうしとの絵しうじとまさやまひとあひこすけ
てるん。まうてきんべしうまけいふくいとりさう
一 ある御ま(?)ゆばしすまして。いふあしこされよそひを。
まちうけあり給ひんとれがうしくも覚子まいじく
こあり侍しをこよ花をばそぐものて。あげうるうれ
物紙の。めつきれすびひりもするを給ひんもまん。もうさ
ありてもんべうるへきとやのんばうあしくこうし
此笑のうち紙。女二の宮のれうこ。ざ御まいつひあさ
ぬもうあり。とゆばま。ふづうくあんこそさびうろ
さ御ま世人いおさくこうへきほさけいへと心えて
我さらうまさ。れげよとあんいうく此まひあきしれ

ゆゑ大夕ねはおほやけがたはやうくととなふめれど
かやうにあさけびたるかたはもとよりしまぬにや
あらんかれ(朱)院行ずも心をよび給はぬことはおさく
なきうちにもがくのたのことはれこころとゞめて
いとかしこくしりとくのへなへるをさこそおぼし
すてたるやうなれしげりにきこしめしすまさん
ことはいましもなん心づかひをしるべき皮大夕ねと
(柏ノ)もろ大きにいれてまひのけりたべのようい心むん
よくをしたへなへ抱の師などいふ抱はたゞけがたて
たることこそあれいと口おしき抱なりなどいと
なつしくのたまひけるを(柏ノ)うれしき抱りしかる

しくつましくて、ことずくなるまて、此れまへとらく
ちちなんとせんは、例のやうに海やうにもあらぞ、
やうくすべり出ぬ、ひろがしのおとゞまて、大内の
つくろひいぐし給、ぐくへまひ人のさうぞくのこと
など、文(柏ノ)をこちひくらん給、おるべき限いうじくつ
くしめんるに、いとゞくらしき心しらひそふもげに
此ゐいとふるさ人まぞ抱き給めり、かふもかくな
心この日なれど、れうらぐもれこ給もんに、こゝ和
なくはあらもじとて、此れ紫の日も、おるさしら
つくどこに、えび深のしるがされをこさるべし、かふは
あをいろにすもうがされ、ぐくへ三十人かふもしら

ぶさゆをきたりたりけるのかたのつりどのに、川ぐさ
たるらうをがく所(そ)にて、山の南のそむより、れ前に
いづるほど、紀遊(せんゆう)寺(ゆう)といふもれあそびてゆきのくだ
いさうちかに、其のとおりちかく、梅のかしきたる
かひありて、ほくゑこたり、ひさしれこ寸のうちに
おりしまをは、或(ゆう)の家、右(ひげ)のおとゞむかりさふらひ
なて、それよりしもの上ぎ、ハ寸のうに、ハぎとか
らぬ日のことにて、れあるしおどけぢかさほどに
つうまつりおしたり、右(ひげ)の大殿の四郎(らう)君、大(タ)将殿の
三ら君、兵(常)の家のそんけうの君ぐちふたりは、まん
ざいらく、まゝいとちいさき程にて、いとらうたげや、

四人ながらいづれとなく、ふるき家のこまて、かくち
おかしげまうしづきいでゝ、ちひなしもやんごと
なし。又大将の御内侍のまけぢしの二郎ぎこ、
或本の文の兵湊のこといひし。今は源中納言の
御子、皇麾、右のおほいとの三郎君陵王、大将殿
の右郎君落蹈。さてもしゐいへつゝく、長喜楽
などいふまひどもをなん。おなじ御ならひの君達。
おとなくちなど舞けり。くれゆけば三寸あげさを
ゐて、もれくけうまさうに、いとうつくしさ。御むまごの
君ぐちのくちすぐこまて、まひのさ夜も、よく
こゝぬてとつくして、御師どもしなのくて乃

假ねをとへるてけるよかうさうどくしさ候
くまへてめづらしきよまひ給ねをのがれともいとらう
うしと思ばをおいめくるらば戸ちはられあららば
おとしぬか。或(愁文)のくろやもれむまづをおばして
流れのいろづくまで志はられ給。あるじの院(浮)
(詩)をぐちよもひよそへてハ思ひたまへてとゞめがくさ
ゑぎたりられ。(柏)木のゝ心とめて淀く思ふらく。
いと心もづしや。さりとも。つま志りしちまん。さう
さ後よゆめあそし月よ。おいもえのがれぬよざ
あれとてうちやア給よ(禎)人よりけまあづちら所
あて。まうとよ心ちもいてしちやましくられがいうびさ

こともめもとゞまらぬ心ちする人なしもさし
けさそそしきひし川くの絵こゝふれのやう
なれどいとゞむすつぶれてさうぼのめぐりうるも
りしらいさくあげゆれば気色ぢうりまてまぶさら
ひすを浮ゆんじとゞめて柏ゝもとをなぶらしさびく
しぬこまへば柏ゝもしこうくてもてけづらふさ海
なべての人ゝすずあし柏ゝこうらさこぐりて
ぐこれはまぶこともさてめるまうで絵ぬるまく
ゝいといさくまどひて例のいとおどろくしさきひ
まもあらぬ絵いかなればうるちゝん つゝましと
抱をいつるゝけれのぼりぬるまやいとさいふぢり

おしすべき心よはさくは思しれど、かくひたくる
なげかれど、うつろふ思ひ、もしくもしのさひの
まどひこゝもあらざりけるや、そいとくらべつ
ひのふ、おぼくげにかの身おぼしさしぎそ。よそく
まそいとおぼつかなしとそ、君よつて笑ひ給ひ女
なのおぼしうる雨、又いとこうろづしをかくて
もぐさて月日はうつろふのどくまおひかだ見えて、
いとしまへぬれ心ざしかれど、見まいて、あれなめり
べきうぐそでよやとさ上ハ哀まうしくなをられて
おぼしちげんことのうくじけるをいろじに
さふ、舟れ息所も、いとゝいたく親のめそ。よれこく

して、おやとばちとさらまれにとさきありて、かゝる
れなるしひはとあるおりもかゝるおりもおもなれ給
まゐこそ例のことなれ、かくひきけれて、こゝろ
かゝ抱し給までもすぐし給かんが心げくしなる
へきことに候、さげしこゝまそかくて心こゝろまへとれ
かゝりしまれ本性ぢかりをへぐそくこゝなり給こと 柏子
ちりや、かぎなるぬ力まそ、をよびがこされなるしひ
まお雨志ねまゆるされなりて、さゝふ志るしまは
なぐ世ま給て、かひなき力の程もすこし人とひと
志くなるけぢめをもやれしんぢこるとこそ志ふ
給つれ、いとゝいとしくかくさへなりもべれど、おろき

心ざしをさま〳〵にしたてられずやあり侍り
あはれとおもひ給ふかはちんとまりござさ心ちうき色ゝ
ゆきさやうなまじくおもひのへしくしあどもろくこゝまちさき
おそらくはまもえつかへ給ふを〇ば。文母の恩（悪心）うしろ
めくく恭しくてあど（初）かまへこゝえんとはおもひ給まじ
きまれは心ちもすこし御ちかずば心ばせをきと紀え
おゆくるの中にまづざりつきぞ床しくもこのまし
くもこぞ恭しのへぐくいとおぼつかなきこしく
うしこをこゝ給も文（地）いとこゝかりあり。へ（狽心 あまなれども）うりきうさ
あらけりけずめよや。ざりつまぞ恭ひあまひへうつ也
いきつるあをらおしくしあそ。忘かしもえあなぜむ

くるしきまれましの人ハ心ちのかく恨ニ御ぼゆる
おりしもこゝしなしざらん。つゝみかくいぶをうる
べし。今ハとこれこゝなくさうを給ひ。いと志のひて
ひろりなてゆしんぞよかるしずまる對面給ひしん。
あやしくこゝなくさろかるかぶよて。ことに心れて。
をろうに御ぼさるゝことありつゝんこそ。かやしく
給れかるいのちのほどをしらで。けすゑなかく
のこさひ給りけることゝなくくひろりこまりひぬ。
[illegible]やハとまりなて。いふるなく御ぼしこゞれこり。
[illegible]大変にまちうけ寄しなて。よろげにさりぎ給。[illegible]さるハ
こちまちに御どろくしきれこちのさ海りも

あらぎつきごろもれなどをさしに来らざりけるに。
いとゞもちなき かうじ(柑子)などをさしに入れて海にぎ。
こゞやうくもれにひきいるくやうにこし給。さ家
とさのいうそくのかく抱しの人ぞよれ中おしこ
あらしがりてれとゝふらひに来り給ぬ人なし。
うち(今上)よりも院(条)よりもれとゝふらひしぞく男しいく。
いとゞくおしこおぼしめしたるにもいとゞしさ
おやこちのれころのこまどふ六条院(源)にもいとゞ口
おしきつぎなりとおぼしおどろきてれとゝふらひに
こびくねんごろにちくおとゞにも男し給。大将(夕)に
ましていとよきれ中なれバげぢりく抱し給ひく。

いうじくちげさありき給。（朱ノ）此笑は女又白まちりに
りかゝるときれやむごとくちきよゞ遊りの。をもく
ひづらひ給ふ。おやはらから。おまたの人ぐ。さるゝ
うきれちからひの難き。志ほれのへる比ほひまて。
もれすきまじきやうちれど。つきく（月々）まとゞこほり。
つゝとぐさまあるを。さてやむまじきことちれば。
いでゝ人ちほしとゞましん。女（女三）又の此心のうち
とぞ。いとおしくらひきてきを給。例の女十寺
の此ぞ經。又ゝ此（朱ノ）おりしますれ（仁和寺）ちまも。ようべ家さ
ちれ

69038
6A278